思議 おもひはかること

沒年 死せし年を云ふ。

一旦云々 一日又は一度の遊にてはつくしがたしと云ふ意。

今を距ること、百二十年なり。妙義に在りては、則ち曰く、長清法師正當一百年と。故に東叡王奏して、僧正位を贈られたり。神仙固より思議すべからず。沒年の同じからざるは、乃ち其職由のみ。唯山の海内に奇絶なる、遊ぶもの何ぞ罕なる。余にして記せずんば、亦將何を以て傳へん。然ども、余が登る所は、中岳の一山のみ。山の大なるは、白雲金鷄皆屬す。豈に一旦の能く盡す所ならんや

其後、再遊して石門を記したるものには、大抵適意は、復逢ひ難し。余多くは、再遊せず。獨り金洞の勝は、夢寐未だ曾て懷に在らずんばあらざるなり。會九峰山人、我が再遊を促す。神飛びて恍惚たり。遂

拉して 迎へて同行すること。

孟夏 初夏即ち四月なり。

卿導 嚮導に同じてびき。あんない。又その人

に山伯經を拉して發す。亦其手を恃みて、我が適を圖せんと欲するなり。已に山人の居に宿すること、四日。孟夏十有一日、霽を得て、仁田里を發し、牧水に循うて行く、凡そ十有二里、其村を小股と曰ふ。山稍近づけば、則ち石奇にして流劉なり。人籟泉聲の爲に奪はれて、復相語らず。伯經佳境を擇びて以て圖を作りぬ。果して是れ一適なり。行くこと十數里、山已に近づけば、則ち霧收り、雲散じぬ。豈に我を待ちて、而して媚ぶるか。伯經得意益甚し。山寺に抵りて、足を休ひ、卿導を雇うて先づ第一門に登る。蓋し門にして山、山にして石、其高さ幾百仞、垂天の雲の如く、兀然獨立せり。寔に門

兩棖 門の兩方のほこだち。

兀然獨立 ぬつくと獨り立ちゐるを云ふ。

其闃 門に譬へて其しづかみ。

なり。門楣は山影の如く、其高さ數十仞、兩棖相距ること十餘尋、伯經驚呼嗟嘆し、遽々班荆して圖す。門前道窮る。唯導を逐うて前む。伯經勇往直前して、垂枝藤蔓も亦顧みず。導者上に伐り、下に披いて、先んず。余隨衡二人と相呼びて續く。乃ち一巖頭に坐して、以て第二門を望む。門は馬鬣崖上に建ちて壁す。故に望むべくして出入すべからず。上裒く下狹く、偏にして倚せること左腋の如く然り。但垂天の雲の如く兀然獨立するは、則ち似たり。第三門は、半輪の如く、洞口の如く、高さ僅かに十餘尺、其屋も亦甚だ高からず。其闃は、截然として越ゆべからず。乃ち所謂馬鬣の亘りなり。獨第四門は

大壑に云々 大谷にさしかゝるとの義。

鬼寢峰 今は何と云ふ岩か不明なり

夢寐云々 れてもさめても忘れかねるとの義。

甚雷厦ナ　二十餘尋、高さは、則ち第一門の三の一に居る。門前大壑に臨めり。測る可からず。壑を隔てゝ、樹立するものを、鬼寢峰と曰ふ。峰は特秀にして、上平なり。固より至るべからざるなり。第三は、第二の第一を距るより近く、第四は、第三の第四を距るより近し。二と三とは遙かに相並び、三と四とは遙かに相對せり。間皆半里ばかり、四門皆南面せり。北より數を起すものは其險に漸すればなり。伯經圖を作り、四幅乃ち成りぬ。然れども、亦其門を青碌するに、過ぎざるなり。若し夫れ、滿山金碧の美は、豈に一朝一夕の能く盡す所ならんや。我をして、愈益其勝を夢寐せしむるかな。遂に

山寺に宿して記しぬ。前記に言ふ所の如きは、復贅せざるなり。

前記は、安永九年の作にして、後記は天明二年とす。又、依田學海翁の金洞紀勝は、八項に分てり。今之を左に、

復云々 二度記せぬとの義。

安永 後桃園帝の朝九年は光格帝の御宇、十年に天明と改元

中　茶　屋

妙義の祠より左折して小徑に入れば、山路羊腸、巨石磊砢、密林を穿ち、懸崖に沿ひ、落葉積ること數寸、左右の雜樹、丹黃錦の如し。登ること一里、豁然として平曠なり。中茶屋と曰ふ。往時香客多く、山民屋を結び茶を賣りしといふ。今廢る。東に妙義を望み、北は即ち金洞、西を金鷄と爲す。其南は則ち田疇百里、眺覽極めて

濶し、妙義の背面は群峰聳立し、劍戟を排するが如く、屏障を列するが如し。其奇巖の儼立して、神女の冠帔し雲に駕して來るが如きを、辨天峰と曰ふ。其峽崖萬仞奮迅して立ち、獅子の怒吼し、群獸聳伏するが如きを、鼓墜崖と曰ふ。金洞の奇峰、天を刺し五指を植つるが如く旗幢を揭ぐるが如し。金鷄遙かに大壑を隔て、奇巘羅列し怪岫駢立し、雲を擘き空を摩せざるものなし。其北の一峰、老嫗の兒を抱くが如き者を、抱兒巖と曰ふ。其南一洞門、巖上に在り、天光を罅漏する者を、箭洞巖と曰ひ、其最北端を天燭峰と曰ふ。卓立すること、蠟燭の如きが故に云ふ。金鷄、古より人跡至らず、故に能く詳

儼立 いかめしく立つこと。

聳伏 おそれ從ふこと。

罅漏 すきまよりもるゝこと。

籃輿 山かごのこと

翩を云々 羽ぐきをそろへ飛ぶ用意をするに似ることなり。

浮屠 寺院のこと。

にする者なし。

大日峰

中の茶屋を過ぎ、阪路險隘、僅かに籃輿を容る。左右石に觸れ、覆らんと欲する者數なり。仰いで峰の跳り巒の舞ふを見れば、殆ど人頭に向つて墜落せんとす。劍の如く、槊の如く、華表の如く、竹の籜を抽くが如く、靈芝の如く、獸の伏すが如く、鳥の翩を整ふが如く、奇幻詭怪、殫く述ぶべからず。復登ること半里許、稍坦なり。第一華表を得たり、石門を右に、天燭峰を左に見る。復進めば即ち金洞。西峰なり、山腹に祠あり、舊巖高寺と曰ひたり。浮屠に屬す。後佛を廢して大國主尊を

災に罹り 火難に遇ふこと。

蚓行蝸附 みゝずの這ふが如く蝸のにじるが如くして進むを云ふ

祀る。明治十四年三月、災に罹り皆燬く。今假りに造る石磴を登ること數百級、武尊の祠を置く。祠後に一峰突起す。三十丈可なり。怪巖狂巘ありて、其左右を簇擁す。峰腹を金洞窟と曰ふ、又躋ること數十步、兩巨盤相倚り、僅かに一縫を通ずるのみ。蚓行蝸附じて其上に出づるを得、磨鬚石と曰ふ。其巔は則ち大日峰なり。群峰四面より環り向ひ、谷底より拔起する者無數なり。釋迦峰、金剛峰、五臺峰最も峻絕す。大黑巖、鬼面巖、稍卑し。嶙峋崒嵂、森立王削、骸豹蹲獅、筆卓劍植の若く奇を獻じ、怪を呈す。實に天下の奇觀なり。

石門第一

石色蒼黝　石の色が青黒きこと。

垂天　天上より垂るゝを云ふ。

虻枝云々　みづちの如き林が石のかげ目より出る。

石門は、金洞の東方に在り、第一華表を距ること百歩許徑路より右折すれば、亂石層累たり。躡んで而して登る第一門を見る。巍然として聳立す。五十丈可なり。兩根相距ること十丈許、石色蒼黝、仰ぎ見れば虹霓の天に亘るが如く、狀垂天の雲の若し。蓋し固より純石の一巘なり。往古地震ひ、衆峰搖撼し、鉾角撞擊し、此大窟を刳剔し、暴風之を磨し、狂雨之を滌ひ、日炙り、雨淋ぎ、遂に一大門闕を成す耳。身門中に在れば、其屋の大なることを知らず、稍上りて第二門に至り、反つて之を顧れば、屋厚く且つ大にして、二松ありて植つ。石に寸土なく、虻枝石罅より迸出し、蒼翠滴るが如し。又矮

糾纏　たけ低き樹や苔などがむらがりてまとひつくこと。

第二門　第一門のすぐ上に在り。

樹苔蘚叢生糾纏す。若し之に躋ることを得ば、其山たることを知り、門たることを知らざらん。

第二

石門を入れ、右折して登る。徑の歩を容るべきものなく、石鋩廉利、動もすれば輙ち踵を嚙む。一歩を移す毎に、必ず導者に援けられて、然る後進む。導者遙かに指して曰く、第二門見ゆと。形彎月の如し。欹側して傾かんと欲す。高さ第一門の三の一を減ず、危巖の上に在り。四邊絶壑、望む可くして即く可からず。門の左側の一奇峰、壑中より突起し、上豐かに下殺ぎ、槌子の如く然り。又楓樹あり、其側に生ず。殷紅血の如し、此門巖

陰森 物すごきこと

烏桕 たうはぜ。

門闔 門のしきみ。

平衍重複 變化なくして千篇一律なるを云ふ。

石層疊、氣象陰森にして、翠嵐人を撲ち、久しく立つ可からず。

石門 第三

屋甚だ高からず、棖楣極めて厚く、一洞窟の如し。其中人を通ず可し。高さ第二門の四の一に居る。左右前後、峰巒環遶し、丹楓烏桕、上下相映じ、門闔馬鬣の如く然り、踞して憩ふ可し。

石門 第四

文は變化を尚ぶ。奇論確言ありと雖も、若し平衍重複せば、一讀して之を厭ふ。山水も亦然り。金洞の四石門は各變ず、未だ嘗て重複せず。但長篇巨作の一大議論を

均量云々 その程ん得てあること。

軒豁云々 大度量あるさま。即ち景のすぐるゝを云

首尾 はじめなはり 第一石門と第四石門とを云ふ。

以て起る。一大議論を以て結ばざるを得ず。乃ち輕重大小均量相稱ふ、然らざれば、變化ありて而も結構なし。第四石門は、軒豁雄大、第一門と相類す。而して高さ三分の一を減ず。其屋鵬翼の左右に張るが如く、縣崖を相屬く。前は大壑に臨み、攢峰林立す。特拔する者あり、競起する者あり、崩れ壓せんと欲する者、奮ひ翥らんと欲する者、銳き者禿、げたる者、飛騰聳峭、中に鬼寢峰と名づくる者あり、上平かに下狹く、極めて奇絶と爲す蓋し、二三は變幻の奇を極む。其中にありて一四は、豁大を以て之を首尾す。而して必ずしも雷同重複せず、亦妙ならず乎。余、黃山、華山、匡廬、雁蕩の諸記を讀み

門闕 門に同じ。

宇宙 世界と云ふ義

しに、並に石門あれども、然も其言ふ所を審かにすれば或は兩巖對立し、或は洞穴人を通ず、強ひて名づけて門と爲すのみ。我が金洞の石門の如く、屋あり、根あり儼として門闕を成す者に非ざるなり。況や、多きこと四門に至るに於てをや。又況や、毎境變化し、一門は一門より奇なるに於てをや。又嘗て海外諸國の名勝圖を閲せしに、未だ其奇、石門の如き者を見ず。然れば則ち金洞の石門の奇は、宇宙第一奇と爲すとも、誇言に非ざるなり。

天狗巖

金洞に遊ぶ者、多くは第二門に至りて止む。其第四門を

縣崖 かけ。きりきし。

碧霄 青そら。おほぞら。天。

輝映云々 うつりてきらくしすること

極むる者は、歳に數人に過ぎず。四門を過ぐれば益險に益奇に、双巖巉出し、縣崖門の如きを見る。疑ふらくは、四門の外更に一門あるかと。近づきて之を視れば、即ち巖頭相距り、仰いで天光を見る、門に非ざるなり。巖下に踞して崖を窺ふに、奇巖ありて拔きんで起つ其數を知らず。竹筍の土を破りて、碧霄に冲らんと欲する者の如く、四門に見る所と同じからず。蓋し彼は巨、此は小、彼は奮怒跳躍し、此は警拔秀削なり。又楓樹あり、丹黄繡錯、輝映絢爛たり。導者に問ふに、此巖の名を以てす。曰く知らずと。偶巖上を見るに、一小牌を置き御嶽大小天狗の字を書せり、假りに天狗巖と名づけぬ

抱載 いだきもてのすること。

列擧 一々數へあぐること。

觀物峰

天狗巖を距る二十歩可、登頓下上す。一巨巖あり。其上層數大石を累ねて奇峰を成す。又一磐石あり、其上に横臥し、峰と相接せず、大力の人ありて之を抱載する者の如し。其巔に攀躋すれば、則ち以て石門及び諸奇峰を一望す可し。

と。こは明治十八年の作なるも、余が遊びし三十六年の冬と相距る稍遠く、遊客年々に多く、路も亦大に開け、嘗て行かれざりし處、自ら攀づるに便に、岩石の如きも一々名を付せられ、一々列擧しがたき程にして、金鶏山にも容易に登らるべき今日なり。實地に違ひし事など、今一々論せず。

尾花の波 すゝきの穂の風になびくを波に喩にて言ふ語。

萍水 旅から旅にさまよふ事に云ふ語。

枯

西風吹き老いては、白う寄せ來る尾花の波も絶ゑ、落つる夕日の影も冷かに、一本松の立てる更に淋しく、野末に流る、入相の鐘聲先づ吾が心の底にしみわたりぬ。見渡せばいとゞ淋しく、昨日まで、綾錦と見し紅葉も、あはれ嵐に散りて野の眺め、一しほ荒れ曾ては優しく鳴きし蟲、宿とせる小草夜毎の霜に枯れ、今は秋の譜聞くに由ぞなき。まして時雨降る折、辻堂に立寄れば、若き巡禮、さては老僧、東西南北跡と定まらぬ萍水、談半ばならずして塒いそぐ鴉と共に相別る。枯野に又なく憐をぞ添ふ。

八千草　いろ〳〵の草と云ふこと。

青女云々　秋の女神のこと。すさびはなぐさみの義紅葉を染めなすと云ふ。

初冬小記

吹く風寒し、冬は野山に音づれぬ。紅紫とり〴〵優しう徑かざりし八千草は、夜ごとにたく霜にうらがれて、蟲の宿あはれに、絶ね〳〵に鳴く秋の名殘さへなし。青女のすさび、錦と稱へし紅葉も、いつしか山風に吹き散され、山さへ骨立ちて見ゆ。磯馴松原しぐる、夕は、旅ならぬ身にして尙、千々に亂る、れもひするを、行手さだめぬ空に、晩鴉の二つ三つ四つ、天末に點々として飛ぶを眺むれば、言ひ知らぬ淋しさにて、何れよりか響く山寺の疎鐘、いと〻心細う聞かる。餘韻すでに絶ゆれば、星きら〳〵と新月は鎌を西天に掛く。

秋の千草　秋期の色々の草花。

滿地　地一面。行く處として皆。

山裾　ふもと。山麓。

冬の野道

あはれ、秋の千草の赤黄、さては紫などの美しき花咲き、野に錦をれり成したるも、既に昨日の夢となりき。月の明るき夕、水晶の玉ぬきし絲きれて、滿地に其玉散りしかども疑はる、露の、きら〳〵と蹈み亂すに惜しき彼處此處、涼しき音に鳴きたてし蟲も、夜ごとに老いゆき、是も亦夢となりたりき。人目も草もと誰やらが歌ひしよりも、尙淋しき冬の野べなるよ。朝のほどに過ぎゆけば、白うなりし枯草には、霜の花うつくしく、野面をかざりて賑かなるに似たれど、其霜朝日の光りに解けゆけば、淋しき元の野原、彼方の山裾にた

◎時序

朝餉の烟 朝飯をたく炊煙。

朝立 朝早く出立すること。早發

田園 郊外。まちそと。

（冬）　○初冬の田園　　千百七十二

つ朝餉の烟一條、直く空にのぼりて眺め靜けし。新草鞋のはき心地よく、霜柱ざく〳〵蹈みゆけば、向ふより來る荷馬の嘶き勇ましく、つく息も白う見ゐ、馬子の追分節と共に、鈴の音さゐて鳴る。冬の野は、なべて淋しきも、朝立は氣ひきしまりて、興も亦いと多し。

初冬の田園

さらぬだに淋しき片田舍。小田は既に刈られて、打ち寄する黃金の波絶ゐ、草人は功成りて跡をくらまし、勇ましきは朝日迎へて鳴く百舌の聲、地には霜の花白う、愛づべしと言はゞ、また愛づべき景色なり。野には、錦飾りし草花の姿見るべくもあらず。窶れし尾花のあはれにも、老いし西風に誰をか招く。優しき娘巡禮も、痩せし旅僧も今日は未だ過ぎず紅葉狩せし天神森、夜毎の木枯に吹き荒され、名殘の一葉もなく、目に觸るゝ山々骨立ちて恐ろしく、荒涼のさま筆にし難し。山畑の岸には、葉落ちし柿の木に澁柿の一つ二つ取殘されて熟したるを、盜まんと騷ぐ鴉をり〳〵來る。そを村の子が取られまじと爭ふなど、をかしき眺めにこそ。小川には水涸れはて、石のかず〳〵白う見ゐ、渡の柳もみどりの葉黃になりて飛び盡し、春風にくしけづり姿は何處、月前に舞奏でし細腰、今し尋ぬるに由なく、夕日洗ふ時雨のけしき殊に淋し。うら山に落栗拾ふ、弟等の興は然ることながら。な

木枯 風の字をも用ふ。秋の末より冬の初めにかけて吹く風の稱。

春風云々 優しかりし春の柳の枯れしを云ふ形容。

◎時序

（冬）　○初冬の田園　　千百七十三

◎時序

筆の花 詩歌文章のこと。此處には其が出來ぬと云ふこと。

れもむき 興味。おもしろみ。

東離の菊 まがきの菊との義。淵明の飲酒の詩に見ゆ。

（冬）　○山家の冬　　千百七十四

べて詩に入りがたき冬の景色、硯の海も胸の詞藻も、枯れに枯れ、筆の花にはひ出でず、只待つは雪合戰と、瀑に竹より太き氷柱取のみ。夜に入れば、圍爐裡のふちに陣取り、燒芋と新蕎麥とに舌鼓打つ、都にては得難かるべき事と誇る。所謂田園趣味は、自ら此等の中に存すべく、初冬の景色一概に淋しとて歎ずべきに非ず。よく味はへば、言ひ知らぬれもむきあり。

山家の冬

言へばとて甲斐なけれど、淋しきは山家の冬の初なるよ。曾ては霜に移ろはざりし東籬の菊、すでに老いて秋の名殘なく

暴富云々 暴富は俄かに金持になりしこと。黃菊白菊を銀や金に喩へて云ひし語。

早發 朝早く出立すること。曉發あさだち。

◎時序

堆き白金黃金、吾家の暴富と誇りたりしも、只の一首の詩さへ賦せざりしかば、今し偲ぶに料ぞなき。蟲の音の昨夜よりはたと止みしは、骸を落葉に埋めるなりしか。夕暮にもなりぬれば、谷風さと吹き來り、ちり〳〵と飛ぶ木葉時雨、亂れて立つ吾衣に點ず。山路にゆき暮れたる、行旅の身には心細からんも、住めば都と自然を樂しむ吾には、又なく趣ふかし。

冬の早發

（冬）　○冬の早發　　千百七十五

冬まだ淺き旅路、一夜山驛に宿れば、窓に亂れそゝぐ落葉の雨しげく、故郷の夢も破れがち、早くも四隣に起る鷄の聲、

◎時序

征装 旅装に同じ。たびじたく。

蹄痕 馬のあしあと

小春 陰暦十月の異稱なり。

其聲々に征装促され、又もや宿をいで立つ。西の空には半輪の月淡う殘り、此方の石橋には霜白うふりしき、雪かとも疑はる、に、驛馬吾よりさきに過ぎけん、蹄痕圓う處々に殘る霧深き向ふの谷かげには、馬の鈴音に和する追分節、手に取るやうに聞ゆ。四面の霧や、霽れゆけば、此頃になき好日和朝日暖かに射して山色鮮かに、垢にけがれし旅衣、あやしき臭す。なべて冬の山路は淋しきが常なるに、今日は何となう愉快に、詩情そゝろに動き、行く句を拾ふ。かゝる境遇あるも、旅なればこそと言はまほし。

小春出遊記

歩を云々 近郊に散歩せりとの意。

畵に云々 田舍の景色のよきを云ひし語。

狂花 かへりざき二度ざき。

◎時序

霜に冴ねたる曉の空あけゆけば、天氣のどやかに、山村水郭も霞まんばかりの小春日和、うら〳〵と人の心も自らうきたち、歩を近き野べに試みぬ。此日、寒からず暑からず、初袷の着心地よろしく、彼處こゝと逍遙へば、小川の岸の蘆紅葉は尚秋の名殘を留め、葉なき枝には百鳥ごまり、其鳴くさまいと勇まし。小橋を渡りて右に折れ、茅屋畵に入る村に來て見れば、破れし垣根には殘菊かをる床しさ、蝶々の影ひらつかぬは、さすがに冬なり。小さき湖水は澄みにすみ、磨鏡よりも明かに、白雲は水中の天にゆき交ひ、眺め靜けき眞晝、鳶は空高う輪を描きて舞ひ、嬉しげに鳴く。節あやまりし狂花愛づべくもあらねど、老樹の櫻に咲ける殊に優し。

◎時序　（冬）　○霜の花　○冬の磯曲　　千百七十八

霜の花　霜と云ふに同じ。

朝餉云々　朝飯たく煙が靜けき空に一直線にあがるを云ふ。

霜の花

殘月淸く、尙西の空にかゝり、朝日未だ上らぬ東雲ごき、吹くとしも見ねぬ北風、しみ〳〵と鬢に音づれて寒し。ふみしむる草鞋の底には、霜柱の碎くる音そく〳〵、冷けさ足の指先より腦にまで沁む。やうやく明けゆく山の麓には、朝餉かしぐ烟、直く一線を描きてたぢ騰る。其處に草屋の一つ二つ淋しう見ね、馬の嘶き遙かに聞ゆ。此朝、愛づべきは霜にして、華やかに四邊に美しう飾りたり。

冬の磯曲

天地荒涼　此世が淋しきこと。

斷續云々　たゆゝくに聞ゆるを云ふ。

わきて　わけて。殊に。

◎時序　（冬）　○冬の山

亂る、蘆花雪よりも白う、秋水明かに月を流せる夕、友と手を分ちし此磯曲、西風既に吹き老いて天地荒涼、あら〳〵しき冬の男神は、あらしに乘じて霰をふらし、雪を飛し、見る目もいたはし。軒傾ける漁家の壁漏る灯は、星の光りよりも小さし。彼方の海づらは、恐ろしきまで黑き色して、荒る、波のたといや高く、千鳥の聲斷續として聞ゆ。

冬の山

やさしきは霞に臥せる春の山なれども、奇しきは冬の山なるべし。夜ごとの木枯に、葉といふ葉は悉く吹き拂はれ、骨だちて見ゆるさま、淋しき眺めながら言ひがたき趣あり。

わきて岩の重りあへる山は、よく節々より麻までをも露し、飾らば處に深き妙味を存す。雪の白う積れる朝は、今更のことにもあらざれど、二三羽の鴉すぎゆくなど、又なき景畫ならずや。もし夫れ、常磐木の茂れる山に、うす紫にたちのぼる炭竈の烟は、辛き世渡る山賤の業ごは知らながらも、詩歌の料に宜し。夏の雨後の山、秋の紅葉の山も固より、諸人の愛づる所なれども、吾は冬の山の奇しきを喜ぶ。

妙味を存す　おもしろみが有る。

喜ぶ　このむあいす

雪打　雪合戰すること。

雪打

轉ぶ處までもと二の字踊み出す風流は、年老いし俳人にゆづり、余等は雪打を企てたり。東西兩軍の相會する處は、武士

に因める櫻馬場、互に整々堂々の陣を張る。是より前、村の中央を流る、川に架せる辨慶橋を界に、敵味力の區別を立て、互に壯丁を募りたり。而して前夜の雪に今日あるを豫期し、羽書頻りに馳せ、戰機將に熟せんとす。吾が本神にては軍略に怠りなく、先づ敵に書を贈り、戰ひを挑みて曰く、

去歳の東軍を侮る勿れ、今日は美事に勝ちて會稽の恥辱をば雪ぐべし。十分に壘を固くし、死士をして守らしめよ。然もなくば、支へがたからん。混戰固より自由なりと雖も、騎虎の勢を戒しめ、互に組討を禁じて負傷を萬一に避けん。足下が配下には、幸に身體髪膚、父母の物たる事を諭せ。

整々堂々　立派にして亂れぬさま。おごそか。

軍略　いくさのてだて。

身體云々　身を大事するやうにと云ふ事。

◎時序

兵を勒し 勢ぞろへすること。

啻に云々 秦の始皇が築きし萬里の長城よりも堅固なりと云ふ語

肉薄 ひし〳〵と近く攻め寄すること。

と。吾が軍は毘沙門堂に兵を勒し、住持に芋粥の饗應を受け雪中を勇ましく進軍し、今し此に對陣する事となりしなり。敵と味方と相距る僅かに半町許、深く積みし雪をば、かき寄せ〳〵、彼れ壘を築けば、此方も亦一壘を築き、双方のかため、啻に秦關百二重のみならず。戰機は既に紛々と降りに降る雪と共に熟し來り、吾れ先づ號令を發し、猛然として敵に攻めかゝれば、彼れ心よく應戰し、雪つかみては投げ、こねては投げ、善く防ぎ善く戰ひ、さすがに壘に近づけしめず是に於て、吾れ咄嗟に死士を募り、敵に肉薄せしめ、忽ち二壘を陷れしに、敵もさる者、別に奇計を設けて吾が軍の背後に出で、本陣に衝き入りたり。留守せるは精兵なれば、敵

中堅 本營のこと。中軍。

死傷云々 討死や負傷者が多かりしを云ふ。

臥薪嘗膽 敵を討たんと雖儀すること

何程の事かあらんと、吾は手兵に指揮し、敵の中堅目がけて攻め寄せしに、近づけしめずと、雨よりも急に、吾が軍少しく退く。勇を鼓して再び敵に逼るや、彼は兵をつくし營を空しうして出で、動もすれば禁を犯して組討せんずる勢、最も激烈をきはめ、双方の死傷算なきに至れり。而して戰鬪尚たけなはに、勝負いつ果つべくも見ねざりしに、審判官大聲に呼はりて曰く、西軍勝てりと驚きて吾が東軍を顧れば、口惜しくも●壘といふ壘、みな敵に降され、赤旗ひら〳〵と雪中にあがる。嗚呼、命なる哉。臥薪嘗膽の一年、又もや水泡に歸しぬ。既にして雪晴れ、朝日高う上り、行く互に肩を拍ちて笑ひ興じ、紀念にとをかし

くも、明日は消ゆべき大なる雪達磨を、總掛りにて造りあげ手の甲赤くし、各家に歸りたり。某月某日。

雪見の記

あはれ奇しきは雪なるよ、一夜にして塵の世を埋め、頃刻にして枯木に花咲かせ、賤しき茅屋も玉の臺、小川の石橋は水晶の欄干と變ず。げに雪景色は、美しくも淸しとも評しがたし。或朝なりき、軒端の松に波の音絶ね、雀のさゝやき靜かなり。窓ひらけば、見渡すかぎりの銀世界、書齋の庭には玉しきつめ、一點の塵も棄つるに處ぞなき。奇しき眺めの朝なるを、偶學友來り、雪を郊外に賞さんことを促す。則ち

塵の世　この世。人間。人海。

松に波云々　松風のおとなきを云ふ。

共に玉屑を蹴りつゝ、天女橋畔の野店に投じぬ。見渡せば、冬枯の野山には六の花美しく咲き、常磐の松もみどり少なき一夜の中に老いて白うなれるも可笑し。川の流れは、岸近き汀は厚く氷りて、たゞ中流のみ靑う南へゆく。今來し橋は、眞白くして銀よりも美しく、酒德利さげて行く、村の子の足もと危く、眞に畫なりき。やがて歸途に就けば、雪又一しきり、余等は忽ち鶴裘を着て町に入りたり。

野店云々　田舍の茶店には入りしを云ふ。

村の子　村童を云ふ。

除夜の記

げに光陰に關守なきの喩、明日ありと思ふ心にはかられて、今年も亦終に今宵とはなりにき。歎ずればとて、返らぬ事な

除夜　十二月の三十一日の夜。おほみそか。

◎時序　（冬）　○除夜の記

山なす慨慨　さま〳〵なる思ひなげきの多きを云ふ。

既往云々　過ぎ去りし前を思ふを云ふ

光陰　つきひ。じかん。

から、十九の春も眼前にせまり、小さき胸にたゝむに餘ある山なす慨慨、誰に向うて語り崩してよかるべき。遠き故郷をあとに、三百里隔てし都の客となり、小暗き燈火の下に既往を顧れば、春の花に吟せしも夢なりき。夏の風に涼しと避暑せし、海の遊びも夢なりき。秋の月や紅葉に筆携へしも亦夢なりき。一年三百六十五日、構へて怠りしには非ざりしなどて一事の成るなく、光陰の流るゝこと早きぞや。今宵に際しての慨慨、誰も彼も同じ事とは思ひながら、世のうき事は、皆吾が一身にあつまるかとまで疑はれぬ。勉めて倦まず休まずば、如何に進みがたき學の道とは云へ、いつかは奥深く分け入るべく、又ながれ早き年の瀬にも戻されまじと、常

朝夕の勞　其日〳〵の骨折り仕事。

一層云々　父母の年よりも白髪となるを云ふ。

に覺悟はせしもの、未だ思ふ事の百の一をも遂げず、故郷にいます老の父母、朝夕の勞を學資に代へ、遠く都へ學ぶ吾へ贈り給ふは、期待ます事淺からざるに、卒業までには尚餘す幾多の年、身に恙なきは、孝道の一とは思へども、其業の成る遲きに思ひ至れば、恐ろしき事ども多かり。よし錦着て歸る日も、年送る毎に近づくとは知りつゝも、一年は一年より、父母の兩鬢に春風吹きのぼり、一層の霜を添ふるかど、うた、憂ひに堪へず。嗚呼、歎ずればとて、何の甲斐かあらん。今よりは更に心に鞭ち、時刻む時計の針と共に競はんかな。いざ來れ新年、喜びて吾れ汝を迎へん。

事蹟云々 有りし事ども登録すること。

行爲の世範 しわざが世の手本となること。

毛穎 筆の別名。

傳紀並解

傳紀は則ち傳なり。事蹟を記載して、以て後世に傳ふるものなり。漢の司馬遷史記を著作し、創めて列傳を爲り、以て一人の始終を紀してより、後世の史家卒に能く易ふることなし是に嗣ぎて山林里巷、或は陰德ありて彰れざるもの或は忠臣列婦にして、行爲の世範となるべきもの、或は奇人俠客の事など、皆之が傳を作り、以て其事蹟を千年の後に傳ふ。文墨者流、時として其意を寓し、雜ふるに滑稽の筆を以てす。韓退之の毛穎傳の如きは則ち是。然れども、皆同じく傳の體なり。若し其品を論じもせば史傳、家傳、

蹲鴟子 琉球のことなり。

其力云々 いもの爲にと云ふ義。

魁偉 すぐるゝこと たくましきこと。

托傳、假傳の四體に分類するを得べし。要するに、其人の事蹟を記し、後世に傳ふるを以て主となす。俗に謂ふ一代記なり。賴山陽の蹲踞子傳に曰く、

蹲鴟子は琉球の人なり。姓は甘氏、名は藷、其先を芋氏と曰ふ、荆蠻氏の族に出づ。數種あり、其蜀に在る者最も富む。岷山の下に居る。楚漢の際、卓氏なる者あり、其力に因り以て鉅萬を致す。其後徼にして聞ゆることなし。魏晉に至り、家聲復聲る。晉の秘書郎左太冲、蜀の材賢を列擧して、芋氏與る。唐宋以來益著れ、其種類遂に九州に周く、施りて海外の諸國に及ぶ。而して琉球尤も著る。蹲鴟子生れて魁偉、重厚にして才力あり、族

▲傳紀

烏喙以下 甘藷の形容なり。

略して 攻めて取ること。

晦匿す 其才能をかくすことなり。

○傳紀の解

人に推さる。人と爲り烏喙にして巨腹、鴟の蹲踞するが如し。故に蹲鴟氏と稱すと云ふ。或は曰ふ。其富を致すこと鴟夷子に類す、故に云うと。慶長中に、島津氏兵五千を率ゐ、南のかた地を略して琉球に至り、其王を降し悉く其貨寶子女を收めて北す。此時に當り、國内文采瑰琦と稱する者、皆自ら炫ひ以て其采取を冀ふ。而して蹲踞子獨り自ら晦匿す。島津氏其濟民の才あるを聞き舟を同じくして歸る。吾れ政を此地に爲す。豈に野史遺賢あらしむ可けんや。蹲踞子是より薩摩の著姓と爲る後漸く諸道に歷遊するに、遇ま所なし。明暦の初、池田氏意を國政に鋭くし、材能を諮訪す。一日、老農數人を

畎畝 はたけ。轉じて民間との義

寡人 諸侯の自ら云ふ謙辭。

飢う ききんなりしを云ふ。

▲傳紀

召し、之に問うて曰く、古の材を用ゐること、諸を畎畝に求む。女輩が知る所、豈に之を用ゐる簡にして功を奏する廣きものあるかと。答へて曰く、蹲鴟子は其人なりと。池田氏曰く、然り、寡人も亦謂爾と。乃ち人をして之を聘せしめ、曰く、寡人子の才にして泥土に辱在するを惜む。今將に子を廊廟の上、尊俎の間に升し、以て民事を議らんとすと。蹲鴟子曰く、羈旅の臣、野に慣れず、君必ず臣を用ゐんと欲せば、臣の舊により朝に慣れず、君必ず臣を用ゐんと欲せば、臣の舊により て之を用ゐるに若かずと。池田氏乃ち之に從へり。五年大に飢う。而して獨り備前備中の民、餓殍を免る。蹲鴟子與りて力あり。事征夷府に聞ゆ、遂に敎を天下郡國に

○傳紀の解

▲傳紀

敎云々 將軍の命令を天下に布くを云ふ。

醜地 あしき土地。

湯鑊水火 煮られ燒かるゝを云ふ。

○傳紀の解

下し、皆蹲踞子の子弟を用ゐ、以て凶荒に備ふ。是に於て爭ひて籃輿席褥を以て、其子弟を聘して、其種類遂に六十州に播く。是時に當りて、宿門舊族、曼倩來服牛旁胡蘿蔔の諸人、蹲鴟子の家道蔓延するを見て之を妬む相謂うて曰く、彼れ新進を以て、吾輩を凌駕するは何ぞや。乃ち相與に謀りて、之を醜地に置く。蹲鴟子、之に處して晏如たり。曰く、居の美なるは我に便ならずと。居ること之に久しうして、其望益高し。蹲鴟子、性樸素にして飾らず、而して黃德內潤ひ、其平居必ず其子弟を率ゐ、纍々として相引き、未だ曾て相疎んぜず。其人を救うや、湯鑊水火をも避けず、毛髮を焦し、金鐵に

▲傳紀

聲價云々 れうちが大にやすしとなり

重厚 おもゝくしきを云ふ。

賤しめらる あなどらるゝとなり。

○傳紀の解

嬰れ、皮膚を剝ぎ、而して顧みず。然れども、喜びて田夫野人と交り、自ら貴重せず。是を以て聲價頗る賤し。王公貴人或は其面を識らずして、而して人物を權衡する者は、獨り之を重んずと云ふ。

野史氏曰く、吾れ少くして六藝の圃に遊び、其秀英の士と交る。獨り蹲鴟子の子弟を好む。其實にして華ならず重厚にして能く人を濟ふを愛す。交り愈熟して、其言愈味ふべし。吁、蹲鴟子の才にして、人に賤しめらる天なるか。江戸に孔陽氏なる者あり、獨り予と其好みを同じくす。來りて予に謂うて曰く、埋れるを揭げ、沒したるを彰すは、史家の事なり。盍ぞ蹲鴟の事を記し、世

耳食云々 聞ける所に拘泥して觀察を誤る人を戒しめよとのこと

旌賞 其事を辻なごに揭げて賞せらるゝこと。

の耳食する者を規さざると。予是に於てか、蹲鴟子の傳を作る。

と。是れ前に云へる滑稽體のものに屬すべきも、亦是れ傳の變體にして、他にも是等の作多し。又、森田節齋の烈幼阿富傳に曰く、

浪華の市、戸十萬に下らず、而して其間幼蒙にして旌賞せらるゝ者、向に義童あり、頃ろ烈幼女あり義童身を以て主に殉す。今を去ること遠からず、人其姓名を記せざれば、傳するに由なし。烈幼女の事、今に及びて記せずば、余恐らくは數十年の後、人或は其姓名を逸せん。故に之が傳を爲る。女名は富。家は内久寶寺町に在り。人

遺孤四 親を喪ひし孤兒が四人と云ふこと。

購はん云々 星金を出すかはりに生命を助けよと賴むを云ふ。

市尹 町奉行のこと

の家を僦り、紙を鬻ぐを以て業とす。父早く歿す。遺孤四、女は其第二子なり。一夜、賊數人突入す。家を擧りて皆逃る。獨り女と長兄仁三郎及び弟吉藏と在り。賊刀を挺き、兄を刼し財の所在を問ふ。時に女甫めて十歲身を以て弟を蔽ひ、蓄ふ所の星金を出し、兄を購はんことを乞ふ。賊怒り、刀背にて女を連擊す。女身を刀下に委して曰く、兒を殺して兄を赦せ、兄なくんば家を如何せんと。辭氣悽惋たり。賊相顧み、感歎して引き去る。後賊捕へられて自招す。市尹、女及び兄を召し、親しく其狀を問ひ、大に之を賞し、狀を具して大府に依聞す。大府、銀十錠を賜ひ之を旌す。實に嘉永元年七月十九日

なりき。賊に遇ふの日を距ること、百有餘日。

森田子曰く、烈幼女の事、傳聞異同多し。余人をして親しく其家に聽かしめ、之を記すること此の如し。義童に至りては、則ち余將に搜索して、他日傳せんとす。

搜索して　其事柄を精しく聞き出してとの義。

と。其他は推して知るべし。

小傳とは、略傳とも云ふべく、ざつとしたる傳紀なり。余が草したるは、我が朝の武將傳なり。極めて平易に之をものし、文の作法を示さんよりは、寧ろ其人の一代に於ける始終を知らしめんとするに在り。其擧ぐる所固より少なけれども、此小冊子に各體の文を收めんとする事なれば、何とて數多の將士を一部門の中に網羅し得べき。

網羅云々　殘らず記載する事は出來ぬとなり。

木曾義仲小傳

木曾義仲は、六條判官爲義の孫にして、東宮帶刀義賢の第二子、幼名を駒王丸といひき。義賢は久壽二年姪の惡源太義平が爲に東國に殺さる。その時駒王僅かに二歲なりけるが、義平これを生けておきては、後日の患となるべしとて、畠山重能に囑み、尋ね出して必ず害すべし、と言ひければ、重能これを諾せしかど、父なき幼兒に及を下すに忍びず、如何せんと思ふ折しも、齋藤別當實盛東國に下りければ、駒王を母に懷かせて、これ養ひ給へと言ひやりたり。實盛これを七日が程匿しておきけるが、東國には源氏方の人多く、中にも義平が

久壽　近衛天皇の御字。

害すべしと　殺すべしと云ふこと。

下す　おしあつる即ち殺す。

部下の者　てしたの人。配下の者。

恙なく　無事に云ふこと。

和殿　對稱の代名詞

父義朝が部下の者到る處に居ることなれば、それ等に漏れ聞かるゝも測り難し。若し見出されて討たれたらんには、賴まれし甲斐ぞなし、と樣々と思案の末、木曾は山深き處なり、其地に我が乳母の夫中原兼遠と云へる者あり、彼に托さば人は知らるゝ憂もなくて、駒王も恙なく成人するを得べし、と心付きければ、直に下部を添へて木曾へ送り遣りたり。

かくて母は、駒王を懷に抱へ、泣く〳〵信濃へ逃げ落ちて中原兼遠に見參し、吾れ女の身にしあれば、此兒を甲斐〻〻しく、養ひ育てんとも覺ねず、深く和殿に賴みまゐらすなり養ひ育て、、せめて人らしくもあらば子にもし給へ、愚鈍ならば從者として召使ひ給はれ、とありければ、兼遠も哀と思

八幡殿　源義家のこと

天晴　一に適の字をも用ふ。感歎の意を表はす語あはれ。

ふのみか、此兒は正しく八幡殿には四代の孫なり、變り易きが世の習ひ、今でこそ孤兒いて養ひ育つる人もなけれども、何時かは日本國の武家の大將となり給はんも測られず、いかさま我れ養ひ立て、天晴北陸道の大將軍になし奉らん、と考へしかば、快く請取りて、木曾の山下といふ處に匿しれき、これより二十餘年の間、心を盡して教養したり。

彼の保元平治の亂に、源氏の一門一族死亡して略盡き、兵馬の權は悉く平家の掌中に歸せしかば、駒王幼心にも深く一門の衰へしを痛み、美事に平家を打ち滅して、天下を握らばやとの志を懷きぬ。されば、馬を馳せ弓を射るにも、これは平家を攻むる稽古なりとぞ戲れける。長ずるに及びて、

▲傳

軀幹魁偉（體格がすぐれて逞しきこと）

加冠（義家のしたる事に眞似て元服したりとなり。）

紀　○木曾義仲小傳

軀幹魁偉、膂力人にすぐれ、殊に騎射を美くし、飛鳥走獸といへども、中てずといふことなかりき。

年十三の春、高祖八幡太郎義家の故事に傚ひ、石清水八幡宮に詣で、自ら加冠して名を義仲と更め、木曾次郎と稱したり。或日、兼遠に對ひて言ふに、我れ孤兒なりけるを、和殿の養育によりて成長せり。かゝる便なき身に思ひ立つべき事ならねど、八幡殿の後胤として、一門の敵を餘所に眺め居るべきに非ず、平家を滅して我れ世に立たんと思ふなり、此儀如何にぞ、と問ひき。兼遠、ほゝと打ち笑み、君を今まで養ひ奉りし眞意は、偏に其事に在りけるなり。決して憚り給ふに及ばず、と打ち答へければ、義仲いたく悅びて、これより有りと有ゆる計略を立て、京都へも度々忍び上りて、密かに平家の動靜を伺ひけり。

有りと云々（及ぶだけ。手の盡さるゝ限り。）

朝家（朝廷と云ふに同じ。）

委曲の事惜（くはしき事のやうす。）

▲傳

紀　○木曾義仲小傳

治承四年、以仁王兵を起して平家を討たんと欲し、令を諸國の源氏に下しければ、義仲主として之に應じ、兵を信濃に集めて、忽ちの中に一千餘騎を得ぬ。平家にては斯くと聞くより、大に怖れて中原兼遠を召上せて、義仲謀叛を起し、朝家を亂らんと企てける由、速かに義仲を捕へ來るべし、命を背かば、汝が首をば刎ぬべし。と嚴しく下知せしかば、はたと當惑せし兼遠、佯りて之を受けがひ、誓書を出して、やがて信濃へ歸り、委曲の事情を義仲に語げ、また當國の豪族根井幸親に深く結びて、これに義仲を托しければ、幸親は義仲を

▲傳　紀　○木曾義仲小傳　千二百二

檄を云々　廻狀を處々にまはすこと。

ひしめく　騷ぎ立つるを云ふ。

幕下　てした。配下。はたもと。

奉じて檄を四方に飛して、軍兵を木曾の山下に集めけるに、下野の足利、甲斐の武田を眞先に、源氏に緣由あるものは我も〳〵もと馳せ加はり、勢威日に張り。平家を只一戰に討滅さんとひしめきけり。

かくて其年の九月に、始めて笠原頼直と干戈を交へて、之をうち敗り、養和元年の六月、僅かに三千餘騎の兵を以て、城長茂が四萬の大軍を敗り、義仲が威名北國に轟き、これより越前越中加賀の諸豪傑、みな來りて其幕下に從へり。これより前、義仲の從父兄源頼朝も亦兵を伊豆に擧げ、遂に關八州を斬り從へけるが、武田信光といへる者、義仲に怨を懷くことありて、頼朝の許に至り、樣々に讒言しければ、頼朝もと

猜忌心云々　それゝみ疑ひふかき生れつき

苦々しく　いと嫌はしくいとゝいとはしく。

當今　いま。方今。

より猜忌心深き性質なるより、思慮分別もなく赫と怒り、自ら十萬の大兵を提げて信濃を攻め寄す。時に義仲が幕下に今井四郎兼平とて、智勇兼備の大將あり、義仲に勸め、城を要害に構へて、支へ戰ふべしと云ひけるに、義仲暫く打ち案じて、さらぬだに、源氏は父を殺し、親類を亡して世に立たんとするなりとて、世の人々苦々しく言ひはやすに、今平家追討の大事を措きて、同族の頼朝と合戰せば、一門の滅亡、いやが上に世の笑を招くべし。吾れ暫く之を避けんとて、軍を率ゐて越後に退けり。頼朝も亦追ふに及ばずとて、兵を鎌倉へ引きたり。

頼朝は心未だ解けねば、更に使者やりて言ふやう、當今平家

▲傳紀　○木曾義仲小傳

朝廷を凌蔑　皇室を物のかずとも思はぬこと。

御所存云々　心の程がわからぬ。

驕傲にして朝廷を凌蔑すること甚だしければ、法皇赫怒し吾が宗族に命じて逆賊を剪除せしめんとし給ふなり。されば今は和殿と頼朝と同じく、戈を枕として旦を待ち、力を王事に致すべきの秋なり。然るに、叔父の十郎藏人行家、國に報ずるの忠を存せず、濫りに私怨を以て頼朝を討たんと圖る由、仄かに聞く所によれば、行家身を和殿に托して、和殿は又これを助け置かるゝ旨なり。この一事、一門の不合、且は平家の侮なり。御所存の程解し難し。若し二心なくば、行家を捕へて送り給へ。さなくば志水冠者をこれへ渡し給へ、頼朝子として養ひ奉るべし、二つの中一つも聽かれずば、兵を遣して戰ひ申すべし。とありければ、義仲又も諸將を集めて

佐殿　源頼朝のこと

曹子　部屋住の公達の稱。

義に於て　人道の大義として。

▲傳紀　○木曾義仲小傳

評定ありけるに、今井四郎曰く、君の御父義賢をば、佐殿の兄悪源太殿討ち給ひぬ。されば佐殿の心には、君必ず我を仇として『怨み居んと猜ひ防ぐ念絶ゆることなかるべし、假令幼き御曹子を人質に送りたればとて、君と佐殿との御中は遂によかるべきにあらず、唯一度に思ひ切つて全く相絶つに若くことなし。と、頻りに諫めけれども義仲これを聽かず、行家が君と隙ありしは知らず、唯親族を保護せんが爲に、其來り投じたるを留め置きしなり。一門の仇敵なる平家を未だ滅さゞるに、いかでか君を圖るの遑あるべき。但行家は我にも叔父に當れば、義に於て遣し難し、仰せによりて吾兒を送り申すべし。尚幼くして未だ東西をも辨へざれば、善く教

心情を看破　心のそこを見ぬくこと。

兵威云々　兵力が益強くなりしことなり

へ給はれ。とて兒の志水冠者を遣しけり。今井が言葉は、實に頼朝が心情を看破せるものにして、其卓識感ずるに餘あり又、義仲が之を用ゐず、忍び難きを忍び、堪へ難きを堪へて頼朝の不法なる要求に應じたるは、同族と親しみ一門を傷けず、唯仇敵を討ぜんとする、高くして且つ優なる心より出でしなり。

かくて義仲の兵威ます〳〵振ひければ、越後越中を從へ、兵五萬を率ゐて進み上りしに、壽永二年四月、平維盛十萬餘騎を引卒し、北陸道より攻め下り、源氏に歸したる諸城を次第に落し、加賀越中の境なる倶梨伽羅峠まで進み來ぬ。義仲曰く、我れ嚮に三千の兵を以て、城長茂が四萬の大衆を破

一戰して　唯ひと合戰にてとの義。

松明　炬火のこと。松火とも云ふ

片敷　ひとりれに衣の片袖を布くこと。

りたり。今我れ五萬にして、敵は十萬なり。一を以て二に當るに過ぎず。且つ敵は遠くより來るを以て疲勞すること甚し、一戰して打敗るべきなり。とて兵を二手に分ちて、昏に及びて攻め上る。義仲近村より、牛四五百頭を驅り集め、やがて戰ひの始まりし折、松明を其角に結びつけて、敵軍に向つて縱ち遣り、其後より軍兵嚴しく襲ひ擊ちしかば、平家の軍勢は夜討もこそあれ、打解寢ぬべからずと警めけれども、下り疲れたる武者共なれば、甲の袖を片敷き冑を枕とせる事とて、之を防がん術を知らず。又一方よりは樋口次郎、林富樫を打ち具して中山を上り、別に根井小彌太二千餘騎、今井四郎二千餘騎、小室太郎三千餘騎、巴女一千餘騎、五手を一

ひし〳〵と　嚴しく。はげしく。

進退云々　のッぴきならぬこと。

追躡　おひかくること。

手に合せて関をあげ、太鼓を打ち法螺を吹き、前後四萬餘ひし〳〵と通りし事なれば、山彦こたへて幾十萬の軍兵とも覺ゆぬ程の狀なりける。

さる程に、狼狽譬ふるにものなき平家勢、道は狹し山は高き此處、たしに押され矢をかけ弓を引くに及ばず、打物は鞘はづし兼ね、唯吾れ先にさきにと爭へども、西は搦手東は大手北は岩石高くして、南は深き谷合、進退谷まりて一萬八千餘騎は谷を埋めて死でけり。大將維盛等は、僅かに身を以て免れたり。義仲は尙追躡して處々に戰ひ、遂に近江の琵琶湖を渡り、兵を比叡山に進めけるに、平家かくと聞くより大に懼れ、安德帝を奉じて西に奔りければ、義仲京都に入りて法

方り　際してその義

懷きぬ　心の中にもちしとなり。

黜陟　おとすとのぼすと、即ち人の進退。

皇に拜謁せり。

朝廷、功を論ずるに方り、賴朝を第一とし、義仲を第二とせられしかば、義仲心に悅ばず、其後　新帝を立つるの議ありし時も、義仲は以仁王の御子を立てんとして聽かれず、一しほの不快を懷きぬ。かゝる間に義仲が軍、民家に入りて財物を掠奪せしかば。上下これを厭ひ　法皇も亦次第に義仲を疎んじ嫌ふ樣になりけり。かくて義仲は、平家を西に攻めけるに、義經吾を討たんとて上ると聞き、急に京師に還りけるに法皇兵を集めて義仲を誅せんと企て給ひしかば、今は堪へ兼ねて兵を率ゐて法皇を圍み、大臣以下の黜陟を行ひ、自ら征夷大將軍に上れり。

終には あげくのはてには。

自害 自殺に同じ、

自刎 吾と吾か首をはねること。

頼朝は、範頼義經の二人に命じて之を討たせしかば、義仲兵を配りて途に拒ぎしかど、數度の大戰悉く利なく、終には十三騎となり、京都を落ちゆきけるが、それさへ次第に討死して、粟津に至りし頃は、今井四郎一人の外誰も從ふ者はなかりけり。愛妾の巴御前とは、既に別れし後なりけるが、四郎と共に北國へ走らんと思ひけるに、忽ち範頼が大軍に逢ひしかば、最早これまでなり、彼方の岡にて自害せんとて、水田の小路を横ぎりけるに、忽ち深田に馬乘入れて進み難く、四郎は如何にと後を見返りけるとき、石田小太郎が爲に、内兜を射られ、遂に自刎す。義仲時に年三十七、頃は元暦元年正月二十日なりき。

船上山 伯耆國東伯郡以西村に在り

探題 鎌倉、北條時代に一地方の政務訴訟を掌り、かねて外寇を防ぎし職名。

菊池武光小傳

武光は、初め豊田十郎と稱し、肥後守武時入道寂阿が第十子にして、武重武吉等の弟なり。武時、元弘三年　後醍醐天皇船上山へ幸し給ひける時、少貳大友と王に勤めけるに、少貳大友二氏約に背きて敵に内應せしかば、武時大に怒り、腰拔武士の力を借るまじとて、僅かに百五十騎の手勢引具し、九州の探題北條英時の館へぞ押し寄せぬ。

武時、櫛田の宮の前を過るとき、其騎れる馬驚きて進み得ず勤王一途の武時大に怒り、何神にてもたはせ、寂阿が戰場へ向はんずる道にて、乘打を咎め給ふやうやある。其儀ならば

牛鬼 正しからざる神靈を云ふ。

既に自害 今はと自殺く

亂軍の中 敵味方混戰の中。

箭一筋まゐらせんとて、神殿の扉を目がけ二矢までぞ射たりける。やがて馬のすくみも直り、打ち笑うてぞ通りけり。其後、社壇を改め見れば二丈許なる大蛇、武時が箭に中りて死し居りたること不思議なれ。日本外史に、武時曰く、何物の牛鬼ぞ敢て義兵を拒むと、顧みて其龕を射るとあるは、此時の事を叙したるなり。

かくて武時は、探題英時の館へ押し寄せ、激しく攻めぬ。英時拒ぎ兼ね、既に自害せんとしけるに、少貳大友六千餘騎の大軍を率ゐ來り、後より菊池を襲ひければ、武時の兵何條これに敵すべき、百五十餘騎散々になり、施すべき謀なきに至りしかば、武時今はと、嫡子武重を亂軍の中より呼び、さて

だしぬく たばかる。あざむく。

泉下云々 あの世にて時らさせるとなり。

一所 共に事をなすこと。

曰く、吾れ今、少貳大友にだしぬかれて、戰場に命を擲つと雖も、義の當る所を思ふが故に、骨を曝さんことをば悔いずされば寂阿に於ては、英時が城を枕として討死すべし。汝は急ぎ我館へ歸り、城を固くして兵を興し、吾が生前の恨を泉下に報いよと言ひ含め、故郷に留め置きし妻子は、出でしを遂の別れとも知らで、歸るを今やとこそ待つらめと、一首の歌を袖の笠印に、

故里に今宵ばかりの命とも知らでや人の我を待つらん

と書き故郷へ贈りぬ。

武重は、一所にてこそ兎も角もなり候はめと、再三請ひしかど、汝をば天下の爲に留むるぞ、と父の言葉固ければ、武重

喞みて 心にもちてとの義。

補せらる 任ぜらる。さづけらる。

反覆云云 そむくをへとも思はずに、

は力なく泣く、大義を喞みて肥後へぞ歸りける。これは實に楠公櫻井の遺訓と時代を共にし、並に歴史上の美談として千古に芳し。

武光は、武重の子武士の後を繼いで、肥後守に補せらる。當時　後醍醐天皇、懐良親王に命じて征西將軍となし、出でゝ筑紫を鎮せしめ給ひしかば、武光　親王を肥後に迎へて之を奉じ、少貳大友等と合戰しけるに、其兵力最も强かりしかば一時は少貳大友も反覆を敢てし官軍に屬し、九州全く菊池氏の掌中にぞ歸しけり。然るに、畠山國人獨り日向に據守し官軍に從はざりしかば、武光之を攻めんとて肥後を出で立つ頃は正平十三年十一月なりき。

行軍 軍隊を進むること。兵をくり出すこと。

釜中の魚 危急の場合の譬喩。

反旗 むほんのはた即ち叛くこと

武光が行軍四日路が間、山を越え川を渉りて、行手は險阻に後は難所にてありければ、菊池に從ふを心よからず思へる例の大友、好機乘ずべしとて又も反旗を擧げ、豐前筑後の道を塞げり。是に於て武光、前後の大敵に取籠められ、釜中の魚に異ならざれども、進みに進みて畠山が籠れる三俣城を、晝夜十七日が中に攻落し、悠々として肥後に引返すに、後を塞ぎし大友勢、其勢に怖ぢすくみ、只の一箭も射かけずして菊池勢をば通しけり。

此時までは、大宰の少貳及び阿蘇の大宮司は、未だ官軍に弓ひく風見ねざりしかば、武光それ等の兵と太友を討たんとて豐後國に馳せ向ひしに、少貳俄かに心變り、大宰府に反旗を

糧道云云
兵糧運送の路を塞がるを云ふ。

相具して
相ひきゐてとの義。

雲霞云云
大軍の屯集するを云ふ。

飜へし、阿蘇の大宮司も亦これに味方して菊池が後を塞ぐべく、九ヶ城を要所〳〵に構へ、一人も討漏すまじと企つ。是に於てか武光、糧道を絶たれて大友少貳を攻め難く、阿蘇の大宮司が構へたる、九ヶ所の城を一々攻落し、一先肥後へ引返しけり。

正平十四年七月、征西將軍懐良親王を大將として、菊池肥後守武光その子武政、及び新田の一族相具して總勢八千人、太宰府に向つて押し出す。少貳は總勢六萬餘騎、筑後川を壓して雲霞の如くに屯し、劍戟林を成して菊池勢を待つ。敵兵の數、味方の勢に比ぶれば殆ど十倍、若し兵の衆寡を以てせば敵すべきにもあらざりけれども、忠義に勇む武光は之を事と

大原
筑後の三井郡に在り。

起誓文
ちかひの文書

枚を云々
聲立てぬやうに口に物を啣へて。

せず。手勢五千騎にて筑後川を打ち渡り、少貳が陣へ押し寄せるに、少貳戰はずして三十餘町引退き、大原に陣を張りぬ。敵と味方と相隔つる數町、旗の紋章もそれと見ゆる程なれば、武光は少貳を辱しめんとて、旗の下に一札の起誓文を張りつけ、如何なる物かを敵軍に示したり。

起誓文は、太宰の少貳が眞蹟、少貳嘗て合戰に打ち負け、危くも討たれんとしけるを、菊池助けたりしかば感激措く能はず、今より後子孫七代に至るまで、菊池の人々に向つて弓引く事あるべからずと、血を絞りて書きし一札とこそ知られける。かくて相持し月を越ね、八月十五日の夜、武光兵三百人を選みて敵の後方へ廻し、七千餘騎をば三手に分ち、枚を銜

不意云云 思ひがけなき襲撃にあひ。

半時 今の一時間なり。

吶喊 ときをあげてつきかかること。

み馬舌を縛り、筑後川に沿ひて川音に紛れて險阻を遶り、忽ち敵の前に撃つて出でぬ。敵は不意を撃たれて驚きあわて、同士討して死するもの三百餘人、やがて夜あけゝれば、武光の子武政千餘騎を率ゐ、少貳が陣中に面をもふらずに斬り入り、先づ少貳が子忠資を討取り、二萬餘騎の敵と入り亂れ〳〵、此に別れ彼處に合ひ、激戰半時あまり、味方の討死三百餘人、敵を討取ること七百餘人に及びたり。

かゝる處に、西征將軍懷良親王、新田の一族及び武光の手勢一手に合して三千餘騎、雲霞を欺く數萬の敵軍の中に割つて入り、蛛手十文字に驅けちらさんと吶喊す。敵は左右へさつ

散々に云云 めつたやたらに射かくること。

必死の戰ひ 一生懸命のいくさ。

忠義云々 武光をほめて云ひし語。

と開き、箭鏃をそろへて散々に射立つ。親王の勢射立てられて退ける時、親王は三處まで深手を負はせ給ひければ、此處を先途と蹈留りて討たるゝもの少なからず、新田の一族も横合より敵の中へ驅け入りて必死の戰ひ、武光このさまを見るより大音聲、何時の爲に惜むべき命ぞや、日來の誓に違はず我に伴ふ兵共殘らず討死せよと、呼はりつゝ眞一文字に敵陣へ衝きかゝる。敵兵固より武光を見知したれば、射て落さんと射かくる箭は、雨の如くに注げども、忠義に凝りし堅固の鎧、裏かく矢只の一筋もなく、馬は射られて斃るれども、騎人は傷を被らねば、乘替へては驅け入り、馬斃るれば又も乘替へ、かけ入ること前後十七度、光武遂には兜を切り落され

薄りしかば　近づきて斬りかゝりたれば

敗績　大に敗北すること。

豺狼　賊をさして云ひし語。

小髪を二太刀斬られたり。時に敵將少貳武藤來り薄りしかば、ねたりと武光、少貳と馬わし並べて組んで落ち、少貳が首を取りて切尖に貫き、兜を取りて打ち着て、敵の馬に乘替へ尙も亂軍の中へ割つて入り今日の卯刻より酉刻下りまで、一息をもつかず戰ひけるに、少貳は子の忠資を第一に一族二十三人、郎黨四百餘人、其他軍兵三千二百餘人まで討たれ、今は叶はじと敗績して寶滿嶽へ引き退けり。肥後勢の討死は千八百餘人なりき。此役、實に古今に例なき大合戰と謂ふべし。賴山陽が筑後を下るの詩の中程に、

當時國賊擅鳴張。　七道望風助豺狼。

西陲　西のはて。即ち西海のこと

血戰の狀　必死に戰ふ時のさま。

獲あり　敵を殺し且つ分捕多きこと

勤王諸將前後歿。
遺詔哀痛猶在耳。
大擧來侵彼何人。
河亂軍聲代銜枚。
馬傷兜破氣益奮。
被矢如蝟目眥裂。
歸來河水笑洗刀。

西陲僅存臣武光。』
擁護龍種同生死。
誓剪滅之報天子。』
刀戟相摩八千師。
斫敵取冑奪馬騎。』
六萬賊軍遂挫折。
血迸奔湍噴紅雪。』

と。血戰の狀を詠じたるなり。

正平十六年、武光また懷良親王を奉じて、五千の兵をば率ゐ少貳大友が二萬五千の大軍を、博多の香椎に破りて大に獲あり。明年足利義詮、斯波氏經を九州の探題となし、程もなく

逆へ戰ふ　來るを待ち受けて合戰すること。

生兵　あらての軍勢

氏經豐後に來る。武光これを打ち聞き、弟武義に五千人を授けて攻めしむ。氏經は其子松王丸を大將とし、少貳大宮司等七千人を率ゐて、長者原に逆へ戰ふ。武義三ヶ所までも創を被り、二十餘町引き退けるに、城越前守五百餘騎を以て、これを援うて奮戰し、敵將以下四百餘人を討取りければ、又も敵兵しどろになりて敗走せり。武光、今は探題も畏るゝに足らずとて、生兵三千を率ゐ、弟武義の軍と相合し、豐後に向ひて發しけるに氏經及び少貳大友等も對持は叶ふまじとて各々その居城に立籠り、嶮岨を恃みて守る、武光は豐後の府に陣を取り、三方の敵を三ヶ年に亘り遠攻にこそしたりけれ抑も少貳大友は大兵を擁して城に籠り、菊池は小兵にて之を

剛怯云云　其兵のつよきと弱きとは、大將次第と云ふこと。

降しぬ　降伏させた。

朝綱云云　朝廷の威信國家のまつりごと。

圍む、菊池が兵必ずしも皆剛なるに非ず、少貳大友が兵必ずしも皆怯懦なるに非ず、其士卒の剛怯は只大將の心に由るが故にぞある。

正平十六年長門の守護厚東駿河守、武光に降る。同年大内弘世兵三千を以て豐後に至りけるを、武光一戰の下に之を降し ぬ。これより武光の威鎭西に震ひ、鋒を交ゆるものなきに至れり。武光、文中二年（北朝應安六年）十一月病みて歿しぬ。

顧ふに、元弘建武以來、朝綱大に衰へ、人心離亂して歸する所を知らず、忠邪混淆して反覆常ぞなき。此時に方りて忠義の志堅く、父子累代王事に力を致して、遂に其節を變せざりしもの、新田楠兩氏の外、肥後の菊池氏に及ぶものなし

名族 よきやから名門と云ふに同じ。

冠絶 すぐれ出でたること。

菊池氏は肥後の名族、武時より數代心を南朝に寄せて渝ることなく、武光の時に至りては兵威最も輝き、殆ど九州を打ち從へ、足利氏天下を掌握するの勢を以てして、且つ如何とも する事能はざりき。其忠節は言はずもがな、武略も亦當時に冠絶せりと謂ふ可し。菊池郡隈府町に菊池神社鎮す、社格は別格官幣社、菊池武時、武重、武士、武光、武政、武朝の靈を合祀す。明治三年の創建、地は隈府城の舊址、菊池氏の祖より武光に至る十五代は、菊池村大字深川に城き、菊の城と云ひしを、武光の子武重に至り、此處に移れるなりき。附記す、懷良親王を祀れる官幣中社八代宮は、八代町に鎮す。

獨眼龍 かたわの英雄との義。唐の李克用の故事

敷島の道 歌道のこと。

總角 つのがみ。又その頃の年。

伊達政宗小傳

獨眼龍伊達政宗は、永祿十年米澤城に生れ、幼名を梵天王といへり。其先は河邊左大臣魚名、八世の祖とも亦政宗といひたり。父は輝宗、母は最上義守の女、世々陸奥國伊達郡に住し、弓箭の業を襲ぎ、其道の事は云ふも更なり、敷島の道にも嗜み深く、詠みし秀歌も多く、文武の名夙に天下に鳴れり今その小傳を叙せん。

政宗、幼少の時の遊戯にも能く禮義を守り、毫も私の擧動なかりき。總角にして小學に入り、禮樂を學び、射御を習ひけるに、天質穎敏、所謂一を聞きて十を知るの才、師傅の人

文武の名譽　文事武事に秀で、名高かりしこと。

蠶食云云　四方の地をだん〳〵横領せんと思うた。

〳〵驚嘆せざるはなかりしと云ふ。

十三歳にして元服しけるに、父の輝宗曰く、先祖大膳太夫政宗、文武の名譽天下に隱れなかりき。然れば汝も又あやかりまゐらせよ、とて政宗と名乘らせ、十八歳の時家を繼ぐ。天正十二年十月の頃なりける。政宗公め米澤城に在りて、四境を蠶食するの志あり。兵を東西に輝かしけるに、會津二本松は固く構へて、旗下に屬する樣子見ねば、政宗父子は監の松と云へる處に陣取り、二本松と屢〻合戰にぞ及びたり。二本松の城主を右京義繼と云ひ、勇悍無双の士なりけるが、何思ひけん、輝宗に和睦を請ひぬ。頃は天正十三年十月、義繼自ら監の松に來り、降參の由を語げ、是よりは御旗に附き

肱股云云　又なきたよりと依賴すとなり。

宙に云云　急ぎ走ることの形容。

て功を樹つべしと、恭しく其意を致しければ、輝宗大にうち喜び、近く膝を交へて、向後は其方を股肱と恃むからは、何吳となく盡忠こそ、と暫し物語して心も解け合ひ。敢て備へとても設けず、やがて其歸るを送りて出でられけるに、義繼構へし事とて此處ぞと思ひ、輝宗に飛びかゝりさま、咽喉に刀をたし當て、輕々と小脇へかいこみ、ひらりと馬に打ち乘り、双鐙あふりつゝ、驀地、土沙を蹴立てゝ、二本松へぞ宙を飛んで急ぎける。

斯かる變事の折節、政宗は遊獵に出でゝ、不在なりしが、此由を聞くより烈火の怒を發し、直に手勢を引具し、鞭を折れよと馬を驅り、疾風の如く義繼が後を追ひ、逢隈川の五六町前

臍を噬む
後悔するとの義。取返しのならぬ。

果てけり
死せりと云ふこと。

武威
武力と云ふに同じ。

にて追ひ付きぬ。若し、父に怪我あらせじとせば、仇をば遁して臍を噬むべしと思ひ、父もろとも併せ撃たんに若かじとて、手勢に命じて鐵砲を亂射しければ、流石の義繼も今は最期と覺悟し、輝宗を提げて馬より下り小高き丘に走せのぼり輝宗を刺殺して其身も亦自刎して果てけり。

政宗益怒りて、義繼が從者を一人も免さず殺し盡し、又義繼が屍を磔にあげ、敵味方に示しけり。輝宗年四十二。

政宗は僅かに十九、其剛猛なるに怖れざるものは無かりき。かくて其翌年二本松を取り、四境の敵を斬り從へ、天正十六年十月、摺上原に大戰して葦名義廣を滅し、それより會津四郡仙道七郡を併せ領し、自ら黑川の城に移り住み、武威を東

王命云々
天子の命令に從はぬ國々。

警報
警戒すべき由の知らせ。

隻眼
かため。めかツち。

北に輝かせり。

京師にては、豐臣秀吉關白の職に任じ、王命に叛く國々を征服せんとて、數十萬の軍勢、東海、東山、北陸を經て關東に攻め下り、相摸國の北條が領せし國々悉く從へ、やがて陸奥出羽の地を指して攻め寄すべしとの警報、政宗家臣をして其樣子を窺はしめしに、其盛んなること譬ふるにものなく、北條の亡びんこと、日を刻して待つべし、と復命す。さらばとて新に使者を行り、關白に音信を通じけるに、政宗急ぎて御陣に參り向ふべき由、仰せ出でければ、直に家臣百騎を從へて小田原に到りぬ。

秀吉、政宗は二十餘の男にて、隻眼にして髮短くれし切りて

相貌奇異　人相があやしげなること。

干戈を動し　合戰をしてとの義。

打破り、其相貌奇異なりと聞きて對面の儀なく、函根山中の底倉に留めて、のち使者を以て尋問されけるは、秀吉辱くも關白の職を授かりし以來、凡そ王命を重んずる程の者は、千里を遠しとせずして我門に伺候す。然るに政宗、累代の家を受け繼ぎ、數郡の地を押領し、終に一度の使者さへ參らせず、常に隣國の諸侯と兵を構へ地を爭ひ、中にも葦名盛隆當家に志篤かりしに、彼の家を滅して會津仙道十一郡の地を奪ふの條、甚だ以て赦し難し、屹度一々陳じ申すべし、とありければ、政宗此由を承り、政宗去年隆盛が男義廣を追ひし事は、敢て妄りに干戈を動し、隣國を犯したるに非ず、事の由を繹ぬるに、一朝一夕の儀ならず、始め義廣、政宗が

與し　かたんすること。

四隣云々　四方の國の敵を引き受く。

推問　おして問ひたづぬること。

父輝宗に叛ける家臣に與し、他の諸族と謀し合ひて、我家を滅さんとせり。程なく父は二本松義繼に討たるにより、政宗二本松を討たんとする所に、義廣また二本松を助けしかば、政宗彼と戰ふこと日々夜々に及び、終に一軍の利を得て義廣を滅せしなり。されど政宗四隣に敵を受け、道路さし塞りて近境の事さへ知り難し。況して遠境の事、夢にさへ知ざりければ、一介の使をも參らせざりき。全く主命を輕んじ、殿下を蔑にし奉りしに非ず。殿下此處に御下向あるに至りて始めて天下の既に歸する所あるを知り、不日に參向致せるなりと答へぬ。のち重ねての推問に、其陳ずる所一々理を盡さゞることなかりければ、秀吉は、北條が亡びんこと近日の中

祇候云々 恭しく伺へよとの義。

拜顏 秀吉に對面する事の敬語。

に在ればこれを平げて後、王命に背く東夷、悉く征服せんと思ふなり。政宗が陳する所僞なくば、是まで併せ奪ふ所の會津仙道の地悉く奉りて軍門に祇候すべし。若し此事肯せずば、兵を募りて己が國を守り、我と戰はん計略を運すべし、何れにもあれ、速かに馳せ歸りて下向を待ち奉るべし、此度の拜顏は先づ叶ひ難しとて、押歸されしかば、政宗急ぎ會津に下り、太閤に勝つべしとも思はざれば、命を奉じて黑川を去り米澤に移り、やがて關白の御迎へとして宇都宮に參りけるに、秀吉は斜ならず悅び、對面の上何かとの饗應あり、自ら茶を點じて賜ひ、政宗を先立て陸奥に下向し、會津仙道其他十二郡の地をば蒲生氏鄕にぞ賜ひける。

嗾して けしかけて事を成さしむること。

齟齬して くひ違ひて。

磔柱 はりつけばしら。

秀吉、都に歸りて後、政宗は會津仙道を奪はれしを無念がり先づ土寇を嗾して亂を起さしめ、機に臨み變に應じて氏鄕を滅さんと企てけるに、謀事齟齬してそを悟られしかば、暫く躊躇しけるに、秀吉、淺野長政を追討使として下しければ、愈以て機を失ひて事を擧げ難く、却て土寇を討ち平らげけるに、氏鄕長政等すでに秀吉に、政宗の實情を言上したり秀吉これを聞き、政宗を召し上しける、政宗豫て心に決する所有りて、從者に金貼の磔柱を捧げしめて上洛し、謀叛の事は讒言に出づるものにして、事實にあらずとて、種々の己が罪なき由を陳じけれども、秀吉更に信とせざりしかど、深き慮りありて、殊更に其罪を問はざりき。是れ天正十九年六

月の事にして、其年政宗は岩手澤に移る。今の仙臺の地は即ち是なり。

名護屋 肥前國松浦郡に在り。

朝鮮の役には、政宗千餘人を引きて名護屋に陣し、文祿二年に朝鮮に航して、釜山及び晋州に戰うて功あり。程なく歸朝して故國に退きけるに、關白秀次謀叛の聞ゐありて誅せらるゝとき、政宗も亦與せしよし風聞ありければ、政宗大に驚き

糺問の後 ぎんみのあげく。

て大阪に上りぬ。再度の糺問の後、既に遠島せられんとしけるを、德川家康なかに入りて、太閤の心を和げける折しも、政宗が太閤を討たんずる計略を、一々記して路傍に立つるものありたり。秀吉これを見て、政宗を憎む者の所爲なるべしさては秀次に與せしといふ事も、此札立てし奴原の所爲なり

けりとて、終に咎も赦されて歸國することを得たり。秀吉薨じて後は、始終家康に從ひ、或は上杉景勝を伐ち、或は大阪兩度の役に功を樹て、寛永三年までに權中納言に進み、同じく十三年病に罹りて卒す、年七十二。

兩度の役 冬の陣。夏の陣を云ふ。

尙外に語るべきものは、政宗或時、名高き一の茶碗を手にして愛でゐたりしに、過ちて地に墜さんとして、思はず心動きければ、深く自ら愧ぢ、吾れ平生大事に臨めども、心の動くことなし、然るに今し心の動きけるは、此器の價千金なればなり、金の多少に心動くこと、武將の愧づべきこと、是より大なるはなしとて、直に其茶碗を庭石に擲ちて、微塵にせしと云ふ。政宗、邊境に人と成りしにより、天下の大局を觀察

心動云云 しまつたと思ふこと。

邊境 國のはづれの土地。

徹頭徹尾 はじめよりをはりまで。

事情 やうす。ことがら。

巧妙 たくみなること。

するの明に乏しく、動もすれば時勢に後るゝを免れざりしかど、其大志を抱きし事は徹頭徹尾渝らざりき。されば晩年に至り、業を日本國内に成すべからざるを觀、力を海外に張らんずる意志つよく、早くも羅馬人を引見し、また臣下を彼地に遣して、歐洲の事情を探らしめたり。

邪法迷邦唱不窮。　欲征蠻國未成功。
圖南鵬翼何時奮。　久待扶搖萬里風。

是れ政宗が當時の詩、其志以て見るべく、其他巧妙の詩歌さゝずとも誰かは越ねん逢阪の關の戸埋の夜半の白雪

通稱 ごほり名。名俗。

近畿 京都附近をいふ。

柴田勝家小傳

鬼柴田の名賣りし勝家は、通稱權六、もと越後の人なり。初め織田信行に仕へけるが、竊かに信長を害して信行を立てんと圖り、事終に露れ、信長と兵を構へ、敗績してのち髮を剃りて罪を謝し、それより信長に仕へけり。勝家固より豪勇、近畿に功を樹てしこと尠なからず、追々擧げ用ゐられ、元龜元年には、命を受けて近江の長光寺城を守りけるに、佐々木承禎其子義胤をして之を攻めしめしに、勝家たゞ一戰に擊ち退けぬ。承禎無念に思ひ、自ら大兵を率ゐて來り圍み、遂に總廓を破られたれど、勝家毫も驚かず、身は本丸に籠りて此

陷る色　城の陥落するやうす。

水の手云云　水路をたちきらすこと。汲道を絶つこと

處を先途と防戰し、容易に陷る色見ねざれば、承禎近在の民に金穀を與へ、城中の有樣を尋ねけるに、其民利に迷ひ、佐々木が營にゆき、此城は水の手遠く、遙けき處より引くなれば、それをたに打ち絶たは、城は一日も保たざらんと、告げ知らせけり。

承禎喜ぶこと限りなく、やがて兵を遣りて水の手を絶たしめけり。是に於て城中の困しみ一方ならず、時々刻々死地に臨みけれども、敢て弱れる色を顯さゞりければ、承禎深くも之を怪しみ、城中の有樣を探らん爲に、和睦の議に假托けて平井甚介を使者に立て、城中に入らしめけり。平井、勝家に對面し、洗手水を請ひけるに、水なみ〳〵と充滿たる大盥を

復命　使に立ちて歸りて言上すること。かへりまうし。

眉尖刀　なぎなたのこと。

雜兵二人して舁き出で、平井が手を洗ひ了るを待ち、二人は殘れる水を何氣なき體に庭に棄てぬ。平井歸りて斯くと復命しければ、承禎をはじめ、人皆事の意外なるに打ち驚けり。承禎、勝家を圖らんとして、却て其裏かとく計に出でしを知らざるこそ、笑止なれ。

かくて城中既に水竭きければ、勝家明日は擊つて出で、花々しく切死せんとて、諸士卒を集めて最期の酒宴を開き、殘れる水はと問ひけるに、二斛許入るべき水缸をかき出せり。さらば此間よりの渴を醫せよ、とて人々にも飲ませ、自身も亦飲みて、さて勝家は眉尖刀の石突にて、たゞ一突に缸をば碎きて必死を示し、明日こそは相與に敵陣に驅け入り、斬りて

斬りまくり無やみにきりまはるを云ふ

歐狀合戰のしぶりを賞して與ふる文書。勳狀。

斬りて斬りまくり、此世の思出にはたらきて切死すべし、と固く誓ひて、其夜の明方に城門さつと左右に打ち開き、切つて出でけるに、生きん心の者とて一人もなかりければ、一以て千に當らざるなく、いと花々しかりけり。佐々木の陣には思ひ設けぬ事とて、其鋭き鋒に敵しかね、しどろになりて敗北せり。勝家は奇勝を得、敵の首八百餘を岐阜なる信長の許に献じけるに、信長は感狀を與へて其手柄を賞し、是より勝家をば釭破柴田又は鬼柴田と世には稱しぬ。

明くれば元龜二年、長島の賊を攻めんとして、左の股を傷けぬ。それより天正三年に至るまで、江州さては越前等の軍に從ひて、拔群の功を奏し、遂に越前北莊に封せらる。勝家任

誡めて注意を與へ。用心せよと敎ふること。

甲兵の難戰爭の災禍。

北莊云云今の福井へ送り來るを云ふ

處に赴くに臨み、信長誡めて言はれけるは、越前は北陸道の要樞たれば、汝その藩鎭となりて鎭重以て懈ることあるべからず、と。されば勝家謹しみて命を奉じ、任に越きし以來毫も油斷せず、先づ加賀越中を討ち平げ、土寇の遺類を滅して配下の諸將を各地の城塞に配置し、令を郡邑に傳へて曰ふに天下既に太平に歸して、今よりのち復甲兵の難なかるべし、されば人々貯ふる所の器仗の如きも、他日に益なきものなれば、悉く官に收めて之を農具に作り換へ、請ふがまゝに汝人民に與ふべし、若し又此令に從はず、潛かに兵器を藏むるものあらず、赦す所あるべからず、とありければ、國中の人民皆怖れて甲冑、弓、鐵砲、槍、刀の類を北莊に致すこと、

鋭鈍云云（きろゝときれぬとは検査せしめて。）

其數幾百萬なるを知らず、勝家一々其鋭鈍を檢めしめて、良きものをば庫に收め、良からざるものをば鍛冶に命じて農具に作らしめ、而して人民に與へ、又鎖に製して九頭龍川の船橋を繫ぎなどして、專ら郡民の農耕と便利を圖りしかば、領内の民悅服せざるはなかりき。

悅服（よろこびて服従すること。）

かくて勝家一面には猶も加賀越中に兵を出して、未だ服せざる者を平げ、やがて越後に入り、上杉景勝と兵を交へけるに適〻信長、明智光秀に弑せられし由の凶變至りければ、軍を班して光秀を討たんとて、柳瀨に至りけるに、秀吉すでに光秀を誅せしとの報あり。乃ち清洲にゆきて秀吉、丹羽長秀等と謀り、信長の孫三法師を織田家の嗣となりぬ。其會せし折

凶變（おほさうどう）

宿老云云（古參はるか鼻にかけ。）

勝家自ら宿老をば恃み、秀吉を眼下に見、衣をまくりて臀を露し、諸將の中に臥しつゝ、秀吉を藤吉々々と呼び棄てにし傲慢無禮のふるまひ、剩さへ兵を路に伏せたき、秀吉を殺さんと圖りしかば、是より秀吉と隙を生ずるに至れりき。蓋し勝家は、織田家第一の元老にして、秀吉素性賤しき出身なるに、殊功を樹て、名聲いたく揚りしかば、猜忌心に驅られてかくは振舞はれけるなり。

伏せたき（おくりおきて伏兵を設けて）

然るに、其のち秀吉の勢威ます〳〵強く、專横の行ひ多きにも拘らず、諸將何れも怖れ服して、勝家には心寄する者とてなく、心いよ〳〵快々として樂しまず、信長の子信雄と相合して、秀吉を伐たんと内密に謀を運しけるに、早くも秀吉に

快々として（くよ〳〵として、）

看破云云　計略を見ぬかれたれば。

術中に云云　思ひしつぼにはまりと云ふこと。

看破せられければ、前田利家を招きて、亡君の變ありてより未だ一歳にならざるに、吾れ又秀吉と干戈を動かさんは私を以て公を廢つするに似たり、泉下の亡君にも面目なければ、秀吉と和して、與に幼君に輔佐しまゐらせんと思ふなり御身等斯くと秀吉に通せよ、とありければ、利家その言を秀吉に告げけるに、勝家は亡君の元老なれば、我れ爭でか彼に背くべき。とて、他事なき體にもてなして歸しければ勝家は秀吉吾が術中に陷りたり、と悅びける。

さて秀吉は又、遠き異域の張良はいざ知らず、我を誑る者この日本に在りとも覺ゐず、彼は我に油斷させむき、春暖の候を待ち、國を出でんと思ふなるべし。若し一たび出でゐせば

要路の守備　かなめなる街道のそなへ。

奇捷云云　思はぬ勝利を得し時分はとの義。

徑に取ひしぎ吳れんず、とて北國要路の守備を、いやが上にも嚴にせり。

明くれば天正十一年三月、勝家遂に意を決し、大兵を提げ佐久間盛政を先鋒として國を出でぬ。盛政先づ柳瀨に中川清秀を斬りて大勝を得ければ、その由をば勝家の本陣に告ぐ。本陣は柳瀨を距ること僅かに四里、勝家使者を遣りて曰く、奇捷の利を得たる時は、威を收めて宜しく鋭を養ふべし、勝つて懈らば殃測るべからず、と軍を引上げんことを促し、往返六回に及びしかど、勝ちほこりたる盛政は傲然として之を聽かざりければ、勝家足ずりして、我が大事を敗る者は佐久間なり、と罵りたれども詮術なかりき。

▲傳紀　○柴田勝家小傳

もみに云云　ひし〳〵と急に。

覺悟　それと前日より期すること

天運　自然の運命。天數。

此時秀吉は岐阜に在りけるが、直に馳せ歸りて其夜の未明に柳瀨を取り圍み、盛政が退かんとする所を、もみに揉んで攻めたてければ、流石の盛政も防ぐに術なく、全軍打ち破られて、其身も遂に擒にせられぬ。其明け方に、敗報本陣に達しければ、將士皆怖れて逃げ散り、殘兵僅かに三千餘、勝家は覺悟の事とて少しも騷がず、自ら刀を揮うて秀吉の陣に切り入ること三度、秀吉これを望み見て、敵ながらも無双の勇將なりとて感じけり。勝家益奮鬪して、運命は素より我が期する所なりとて、退き給へと諫むる將士の言葉を聽き流し、猶も敵中に驅け入らんとするを、家士毛受家照馬の轡を引き返し、天運の傾く上は、戰うとても功の成るべきに非ず、と

旗標　はたぢるし。

途に　行く途中に。

駿足乞うて　よへ走る馬をもらひ受けて

諫め、其身は勝家の旗標を假り、自ら勝家と大聲に呼はりて討死しけり。

勝家は其隙に脫れ走り、途に前田利家が府中の城に立寄り、飢ゑたればとて湯漬乞うて食ひ、利家が共に言ふをもし止め駿足乞うて打ち乘り、本城なる北莊に向へり。此時の從者僅かに百人には過ぎざりけり。程なく秀吉北莊に攻め寄せたれば、將士を集めて最期の宴を張り、我れ遂に猿の爲に誤られて、明日黃土の鬼とならんとす。されば今宵酒宴して人間の事を終ふるなり。我も飲まん、人々も飲めやよ、と十分に歡を盡し、其夜は守備を撤して快く打ち臥しけり。さて勝家は夫人に向ひ、御身は故右府の妹なれば、猿も必ず害す

まじ、一先づ此城を落ち給へ、と言ひけるに、夫人は流る、涙たし拭ひ、妾は淺井家の滅ぶる時、與に死すべかりしを、今また再び恥を重ぬべきかは、とて盡きぬ名殘を惜みしに、折から郭公雲間に一聲漏しければ、

さらぬだにうちぬる程も夏の夜のわかれを誘ふ郭公かな

勝家もあはれ催しまた之に和して、

夏の夜のゆめぢはかなきあとの名を雲井にあげよ山時鳥

侍りし其臣中村全次は、

思ふ同土打ちつれつゝも行く路のしるべや死出の山時鳥

勝家夫妻其曉天守樓に登り、火を放ちて自殺す。歳五十四、夫人は三十七、從ふ所の男女卅四人、これに殉しぬ。

落ち給へ　にげゆき給へとなり。

夫人　おくがた。

蒲生氏郷小傳

蒲生飛驒守氏郷は近江の人、父は右京大夫賢秀とて、近江の守護佐々木承禎に仕へけるが、承禎が織田信長に滅されける時、居城たる日野の中野に籠守し、城を枕に討死せんとしけるに、伊勢國の住人神戸藏人太夫友盛は、賢秀が妹壻なりければ、蒲生家の絶ねん事を悲しみ、先づ信長に說き、自ら日野に向ひ、利害を諭して遂に賢秀を伴ひ、信長が營に至る。此時氏郷年齒僅かに十二、鶴千代と云ひけるが、父と共に來りしを信長うち見て、此兒の容貌を視るに、尋常の人にあらず、吾が娘に配せんとて、岐阜の城に留めたき、名を忠三郎

源頼朝の創めし職名。警備の爲に諸國の國司に屬して其事務を執行せしめたるもの。

容貌　かほかたち。人相。

と改めしめけり。忠三郎幼より穎敏、殊に武を好みけるが、或日稲葉一徹、信長と軍事を議して夜を徹しけるに、之に侍せし忠三郎は、終夜膝をも亂さず、耳うち傾けて聽き居たりしかば　一鐵感に堪へず、世にも珍しき少年なり、他日必ず百萬の將帥とならんと、嘆賞して止まざりけり。

穎敏　さかしきこと

嘆賞　いたくほむること。

明くれば永祿十二年八月、信長伊勢の大河内城を攻めぬ。忠三郎時に年十四、唯一人拔驅して多勢の中に戰ひ、よき首取つて歸りければ、信長大に驚嘆し、その冬娘を妻して日野城に返されぬ。

日野城　近江國蒲生郡中野村に在り

天正十年六月信長、明智光秀の爲に弑せらける時、父賢秀は安土に信長の留守をなし、氏郷は日野城に居りけるが、かく

と聞くより、手兵五百餘騎を引具し、駕籠五十挺、鞍置きたる馬百匹、其外二百匹を從へて安土に至り、父と共に信長が夫人及び公達姫君をはじめ、女房達に至るまで　悉く迎へて日野城に入れ、急ぎて逆徒を討たんと謀れり、光秀この事を聞き、先づ日野城を拔かんと計る間もなく、秀吉の爲に脆くも討たれければ、氏郷は信長が子信雄を從へて京師に上る。秀吉、氏郷が此度の處置いたく感じ、光秀が領せし地の中にて五千石を增し與へたり。

手兵　自身の手下の兵。

處置云云　取計らひ方を大に感心した

柴田勝家、秀吉と兵を構へし頃は、氏郷は秀吉に與せしかば秀吉大に悅びて其妹を迎へて妻とせり。柴田氏亡ぶるに及びて、秀吉は氏郷に伊勢の龜山城を賜ひけるに、氏郷は之を辭

構へ云云　いくさしたるときは。

亂世 戰爭のみの世の中。

して、其城累世の主岡右兵衛佐に讓りぬ。人を倒ふし、自ら利せんと謀るは、亂世英雄の常なるに、氏郷これを辭して受けざりしは、君子の風ありとて人皆感せざるはなかりき。やがて飛驒守に任ぜられたり。

秀吉、信雄と兵を構ふるや、氏郷また秀吉に與し、美濃の加賀城を攻落せしかば、賞として伊勢の松ケ島城を賜ひ、日野六萬石に倍して十二萬石を領するに至れり。のち、木造具正を日置城に攻め、命を賭して拔きたるが如き、紀伊、越中、筑紫の陣に秀吉に從ひ、其都度大功を顯し、天正十六年左近衛權少將、正四位下に叙せられたり。

命を賭して 一命をなげ出してとの義。

天正十八年秀吉が小田原北條を征するとき、又その陣に從へ

假す所云云 容赦せざりしとなり。

拔群ならば 人並にすぐれたならば。

たり。氏郷、號令嚴肅、未だ曾て少しも假す所あらず、發途の日、近習の士、所用の兜を捧げて後に從ひけるに、路草摘みて後れければ、氏郷怒りて之を手討にす。これより一軍みな怖れ、敢て令を犯すものあらざりき。

氏郷發するに臨み、三階笠を馬標にせんことを、秀吉に請ひけるに、三階笠は佐々成政が馬標にして、既に世の知る所、容易に許し難し、若し汝が軍功拔群ならば、許さんと言はれしを聞き、氏郷恚り、此度の合戰に最期の花咲かせんと、畫工をして己が肖像を描かしめ、又三階笠の馬標を造らしめ、其乳母に語げて言へらく、吾れ小田原に至りて討死をば期せり、若し討死せりと聞かば、この肖像を日野の菩提所に納め

ほゝ、笑み　につこり笑ふこと。

我後　自分が死して後の家名。

揮ひ　槍を使ふこと

よと。乳母は涙を流して、君が御年尙若きに、爭でか斯かる事を宣ふぞと留むるに、氏郷ほゝ、笑み、武士は戰場に臨む毎に、死を覺悟すること常なれば、今日にのみ悲しむべきに非ず、殊に此度は遠方の事なれば、死生實に測り難し、我が兒も亦漸く成長しければ、汝よく敎訓して我後を嗣がしめよとて、發向しけるが、必死果して大功を立てければ、遂に三階笠を聽されける。

是より前、氏郷は信雄が配下となり、韮山城を攻めけるに、一夜北條勢、氏郷が營を夜討せしかば、氏郷森のしげ味に據り、一丈八尺の長槍揮ひ、暗中に敵を突くこと其數を知らず敵將廣澤重信これを見て、槍うち揮ひ氏郷に立ち向ひければ

火花散云云　激しくきりむすび戰ふこと

氏郷は好敵ござんなれとて、火花散して戰ひけるが、重信足蹈外して濠の中に落ちけるより、敵兵みな逃げ失せけり、氏郷我が營に歸りて、甲冑を檢め見れば、胸板掛算に四つの創を受け、鯰尾の兜に矢の痕二つ、槍の柄に刀痕五ヶ所ありしとぞ、其戰の如何に激しかりしを、想ひ見るに堪へたり。

恰も中秋　ちやうど八月の十五日。

小田原北條氏亡びて後、先鋒として陸奥に向ふ。やがて會津六郡の地に、越後山道の地合せて十二郡四十二萬石を賜ひて

大封　おほいなる領地。

陸奥出羽守護職に補せられぬ。

封を受くるの日、恰も中秋なりけるが、氏郷は書院の柱に身をもたて、月を眺めてはら〳〵と涙を流しければ、其臣これを打ち見て、大封を受けて恩惠に感ずるの餘り、泣き給ふ

▲傳　紀　○蒲生氏郷小傳　千二百五十六

聲うち潜め　聲を極めて低うしてとの義

なるべしと思ひ、君は斯くまで此度の恩賞を悦び給ふかと問ひけるに、氏郷は聲うち潜め、我れ爭で悦ばんや、假令微祿にても、之を近畿に受けば、殊功を樹つるに便あれども、此度の地は如何に大封なればとて、山川萬里の邊陲、何事も世の人に後るゝを免れず、今よりのち我は徒に老い朽ちんかと思へば、自ら涙の出でしなりと語りけり。

山川萬云云　いたく都遠き國のはて。

始め秀吉、奥羽は國俗剛强なれば、諸將中に就き最も猛勇なるものを擇みて、之に任せんとしけるに、德川家康、茶碗と茶碗は碎け易しとの諺もあれば、剛强の民を治めんに剛强の人を以てせんこと宜しからず、氏郷は無事は言ふも更なり文を好み茶をも嗜み、頗る風雅の人なれば、却て剛强の俗を

制する云云　おさへつくるに都合よしとなり。

名士云云　よき武士に呼び返して臣下とした。

制するに便宜しかるべし、と言ひければ、秀吉げにもと思ひ氏郷に命じけるに、氏郷之を辭して、奥羽は樞要の地なるに某よき臣下を有せざれば此地を鎭撫し難し、されども、今天下に罪を得、禁錮せらるゝ國士甚だ多ければ、之を赦して臣とする事を許されなば、命に從ひまつらん。若し之を聽されずば、いかに强ひさせ給うとも辭し申すべし、とて從はざりけるが、秀吉これを聽しけるより、氏郷は諸國に禁錮せらるゝ名士を招まて召抱へけり。

かくて秀吉奥羽より上洛の後、伊達政宗が密謀にて、葛西大崎の地に賊徒起りければ、氏郷馳せ向ひて各處に轉戰し、賊徒を悉く討ち平げ、のち西上して秀吉に、政宗が隱謀の次

天正十九年
正親町天皇の御宇。文祿と改元さるゝの前年。

第を語げぬ。

明くれば天正十九年、その夏、南部が家臣九戸我主に叛きしかば、中納言秀次之を追討せんが爲め下向あり。氏郷は先鋒となり、九戸城を攻落しければ、去年今年兩度の勳章として奥羽七郡の地を加へられ、本領合せて十九郡百萬石の地となりたり。尋で十二月二十八日、參議從三位に遷る。

病を云云
病氣なおして京師へ來る。

年改まれば文祿元年にして其夏、朝鮮の役起りて、氏郷肥前の名護屋に陣し、明くる二年の春、俄かに病に罹りて吐血す諸醫術を盡しけれども驗なく、遂に國に歸りぬ。翌年正月、病を扶けて上洛す。其十一月、秀吉自ら氏郷の家に臨みて饗應のことなど有りけるが、氏郷の病は日に月に重りゆき、

毒せしなり
毒にて殺せりとの義。

文祿四年二月七日、京師客邸に卒す。年四十とぞ聞ねし。

秀吉初め、氏郷が豪雄なるを愛しけれども、のち之を猜む心生じ、遂に之を毒せしなり。曾て秀吉、征韓の兵粮の乏しきを憂ひけるに、氏郷曰く、公深く意となし給ふこと勿れ、設し臣を韓に封じ給はゞ、蠶食して四百餘州を得申さんと、其大言概ね此の如かりき。又、九戸の戰ひの後、石田三成都に歸りて此度氏郷が合戰せし狀を見しに、尋常の人に非ず。彼の軍勢の道をうつたる事、七日が程も陸續たり、それに一人も軍法を犯すものなかりき。此人、殿下の御爲に二心を懷かざるものならば、斯かる御固めは又と世にあるべからず、能く心得させ給ひて、見給ふべき人なり、と言ひしかば、秀吉

道を云云
行軍したる事と云ふ。

▲傳　紀　○蒲生氏郷小傳　千二百六十

稍云云　義漸く氏郷をあやしく思ふ心が出た。

他志　二心なきことを云ふ。

は其言を信とし、稍氏郷を疑ふ心生じ、遂に毒を與へしにより、忽ち病に犯されて敢なくなりしと云ふ。氏郷心に忌まれしを知り、今は臣が病も幸に癒ねぬれば、朝鮮組平ぐを待ち、兵を提げて海に航し、直に明國を掃定すべし。若し志を遂げずば、生きて再び還り申すまじ、との書を認め、秀吉に贈らんとして、其儘に死しけるに、のち秀吉之を見て、其他志なきを知りしかど、其甲斐なきぞ口惜しけれ。

限りあれば吹かねど花は散るものを心みしかき嵐の山風

との一首は、病を訪ひし茶博士利休に示せる和歌、其毒せらしを知りてなり。茶博士の和したるものには、

降ると見ばつもらぬ先に掃へかし雪には折れぬ青柳の枝

幼名　小供のとき名。

反覆云云　敵となり味方となる事の常なきを立腹して。

眞田幸村小傳

眞田幸村は、信州上田の城主眞田昌幸の二男にして、幼名を源五郎と稱せり。昌幸始め武田信玄に仕へ、其亡ぶるに及びて德川家康に屬す。のち家康を恨みて上杉景勝に歸す。其家康に即きし時、長子信之を遣りて質とし、景勝に歸せし時は次子幸村を質とせり。景勝、幸村を愛して信州屋代郷一千貫を與ふ。家康、昌幸が反覆を憤りて、上田を屠らんとしければ、昌幸大に恐怖し、秀吉に依りて欵を家康に致し、遂に事なきを得たりき。

是よりさき、昌幸つら〳〵天下の形勢を察するに、宇内の英

▲傳　紀　○眞田幸村小傳　千二百六十一

雄、秀吉の右に出づるものあるべしとも見ねず、我家を興さんとせば、深く秀吉に結ぶに若かずと、景勝が京師に入らんとせし折、私に幸村を招きて、汝景勝に從ひて上京せば、以後は秀吉の側に侍るべし、と言ひ含めて、景勝に離れしめければ、景勝大に怒り、幸村を捕へて甘心せんとなしけるを、秀吉さま〳〵に言ひ慰め、是も亦事なくして已みにき。

結ぶに云云　托するになす事なしとの意

太閤薨じて關原の軍起るに及び、昌幸兵を率ゐて家康に從ひ下野の犬伏まで至りけるに、石田三成大谷吉隆の二人、書を致して、〳〵阪方に屬し給へ、其恩賞には信濃全國に封じ申さん、と切に言ひ送りぬ。昌幸は主操なき武士なるが上、三成が女を娶り、幸村は大谷氏を娶り、且つ豐臣家に恩顧深き二

書を致して　手紙を贈りて

人なれども、長子の信之は家康に質となりしより、遂に其臣籍に列して恩遇を被り、殊に其養女を娶りければ、其持すも所も亦父と弟とに異なれり。昌幸は、二子と共に佐野天明山の森蔭に憩ひ、德川家に屬くべきや、大阪方に與みすべきかと謀りしに、信之は德川家に屬かんと言ひ、幸村は大阪方に與すべしとぞ言ふ。昌幸、そは何故ぞと問ふに、信之は德川殿某を待つに國士を以てせり、義に於て畔くべからず。且つ某獨り東軍に從ふときは、萬一大阪の軍敗る、の日、某父氏及び弟の命乞すべければ、我家の爲にも然るべし、と堅く取りて動かず。また幸村に於ては、故太閤、昔吾が危き命を救ひ給ひぬれば、今日あるは全く太閤の恩なり。斯かる

恩遇を被り　よき待遇を受くること。

國士　一國中にてすぐれたる武士との義。

身の榮 自身のりつしん出世。

推し隔て 中に入りて引き分くること

▲傳紀 ○眞田幸村小傳

舊恩あるを、徒に一身一家の安危存亡を慮りて、之を棄て、恩なき德川家に從ひ、身の榮を圖らるべきぞ。且つ大阪の軍若し敗れなば、吾は唯死せんのみ。爭で兄上に命乞をば賴むべき。義の爲に家を棄て、國に殉するは、幸に生を偸みて苟も存するに勝ること萬々なり、と聲高に答へければ信之は眉きりりと逆立て、起ち、兄に對して無禮の雜言、聞き棄て難し、と刀の柄に手を掛くれば、幸村はいざり出で、君が爲に死せんとする此身なり、いざ首打たれよ、と覺悟の體。父の昌幸は急に推し隔て、二人の言葉何れも理あり、此度の軍の原因は、大阪方の德川殿を仆さんとの心より出でしなれば、其邪は大阪に在り、故に邪をすて、正に從はん

恩顧云云 めぐみ忘がたくて。

餘年幾何 老いさき長からぬと云ふこと。

▲傳紀 ○眞田幸村小傳

とならば、信之の申し條、一點の非とすべきことなし。幸村は又、事の是非は措いて論ぜず、故太閤の恩顧忘れ難ければ兵端開くる上は寧ろ大阪方になりて死すとも、德川家に屬して生きずとの申し條なり。信之は其思慮實に遠大に、幸村は其志操詢に義とすべし。餘年幾何もなき父は、其義なき者に從はんとて、信之をば德川の陣に遣り、己は幸村と上田に歸りて德川勢に敵しぬ。

關原の合戰敗るゝに及びて、幸村父と共に紀州九度山に謫せられ、薙髮して傳心月叟と號す。時に慶長六年なりき。父の昌幸は、程經て配所に病歿せり。其後慶長十九年に及びて、家康人を遣し、降伏して仕へなば、信濃一萬石を與へん、と

色を變じて　顔色をかへてきつさうかへて。

監視せり　見かじめした

諭さしめたれども、幸村從はず。更に又、信濃一國を與ふべしとありけるに、幸村色を變じて、吾れ嘗て秀頼公の命を受く、豈に祿を貪りて志を變ずべけんや、事あらば唯一死あるのみ。豐臣德川兩家相和する時は、敢て食祿を望まず、兎も角もして世を終ふべし、再び來りて說くこと勿れ、とて堅く持して從はざりき。

かくて幸村は、常に心を配りて、弓銃甲冑等を集めて時を待ちけるに、德川家にても之を悟り、をさ〳〵怠りなく、其傍近に命じて幸村を監視せり。折しも大野治長より、急に大阪に招かれければ、幸村先づ近村の豪士村民等數百人を集め、十分に酒を飲ましめ、其醉ひ仆るゝ隙を窺ひ、率き來し數十

堂々として　いかめしく立派に。

神符　まもりふだ。守護札。

辭むを云云　辭退するをもきかずして無理に。

の馬を奪ひ、これに彼の用意し置そし弓銃甲冑を載せ、一味の者百餘人を率ゐ、堂々として大阪に乘込みけり。

幸村は先づ大野の邸に至りけるに、取次の者、何者ぞ、と尋ねしに、大峰の修驗者なり、神符を主人に奉らんとて、參りつるぞ、と云ふに、今は登城して主人不在なれども、先づ通り給へ、とて座に請じけるが、其體の賤しげなるを侮り、我等是まで未だ曾て、修驗者の刀を見しことあらず、後學のため、我等に其中身を示し給へ、とて物笑の種にせんと强ふるに、幸村は、これは唯山路を辿る折の護身刀、猪狼などを防がんより外ならねば、御見せ申すべき品にあらず、と辭むを、猶も强ひて已まざれば、今はと引きぬき、修驗者が

佩ぶる猪切の刀、いざ篤と御覽せよ、とて鼻尖へつき出すを見れば、秋水滴る日本一の業物、正しく正宗の作なりしかば一座の者、首をすくめて怖れけり。やがて治長歸館して、殊の外慇懃にもてなし、恭敬を盡しければ、人々いよゝ以て畏れけり。

秋水滴る　名刀の形容に云ふ語。

かくて城中に入りけるに、秀頼五千の兵を授く。幸村これに將として、他の節度を受けて合戰せんこと、心面白からずとて、城の東南隅に假月城と云ふを築き、以て之に據りたり。世に此城を眞田丸と稱し、現時は眞田山又は宰相山とも呼び大阪の一名所たり。さて幸村は守備を嚴にし、敵の寄せ來るを待ちけるに、加賀越中の軍兵潮の湧くが如く、ひし〳〵と

節度云云　さしづを受けて戰爭するは本意ならず。

押し寄せつるに、幸村は勇む士卒を制して城門を鎖し、己は柱に倚りて關せざるもの、如く、うつろ〳〵と眠りけり。敵ます〳〵逼りしかば、如何に〳〵と問へども、幸村尙目を覺す風ぞなき。やがて敵兵、城の塀を乘越ねんと進みしと聞くより、かばと跳ね起き、敵を塵殺するは此一擧に在り、と呼はりて、自ら士卒に先だち、散々に戰うて、加賀越中の兵四百餘人を一擊の下に殺し、數千の大軍を悉く退けぬ。此役を世に冬陣と謂ひ、慶長十九年十一月なりき。

翌元和元年四月に於ける夏陣には、亦幸村大阪に味方し、舊によりて一面の舊となり、敵を一處に纏めて塵殺せんとて、兵を率ゐて平野に出で、第一に伊達政宗の陣を衝き、砲烟彈

制して　おしとどめて

塵殺云云　みなごろしにするは此一仕事の中に在りとの義。

奇策云云 奇計をめぐらして心よく。

殿下 太閤を云ふ。

花々しき いさましき。

雨の修羅場に、面もふらずに馬を馳て士卒に號令し、最も奮戰激闘して、終に政宗の軍を散々と打ち破りたり。其翌日は奇策を立て、潔く、家康が本陣に斬り入らんとしけるに、其謀略盡く齟齬し、流石の幸村も詮術なきに至りしかば、豐臣家の運命も今は是までなりとて、一子大助幸昌を招き、我は此戰に死して、以て殿下の恩に、泉下に酬いまつるべし、汝は城に入りて君と死生を共にすべし、とて城中に遣り自ら衆に指麾して越軍に當り、奮戰して花々しき最期を遂げぬ。時に年四十六なりき。

大助は父と共に死せんと請ひしかど、幸村聽かざりしかば、泣く〳〵城に立歸り、木葉を大庭にしきて其上に坐したるまゝ、物をも食はず、外より入り來る者あれば、父は如何にと問ふの外、物さへ言ふことなかりしに、或人、眞田殿には天王寺の合戰にて、美事に討死し給へり、と告げしかば、大助は涙を流して珠數を鎧の引合より取出し、念佛を唱へつゝ、此後は君の御身と吾身の上なるぞ、と膝をも崩さず行儀正しく一心に念佛して居たりければ、見る人毎に哀れ催さゞるはなく、餘りの事見るに忍びで、御身は手傷さへ負へると聞く、年もまたいと若きことなれば、東軍なる伯父信之殿が陣に送りまゐらせん、言ふ人ありけるに、大助聽かばこそ、父の仰せも有れば、死せんと思へども死することさへ能はざるに、父死して君の御行末覺束なき此際、いかで伯父に賴りて餘生

美事に いさぎよく。りつぱに。

東軍 德川がたを云ふ。

いかで 何として。どうして。

▲傳紀　○眞田幸村小傳

生年　よはひ。年齢。

を貪らんと計らるべき、此身は外に望みなし、唯君と死生を共に俱にせんと思ふのみ、とて手傷に弱りながら、尙も微かなる聲して念佛を續けつゝ、秀頼が自殺せし由を聞くや、其身も亦自殺す。生年十六歳とぞ聞ねし。夏陣は、四月二十九日に始まり、城陷りしは五月八日なりき。

傳とは、傳へて而して信なる者なり。

傳は以て事を傳ふるもの、覈實を貴ぶ。

傳は宜しく質實にして、傳ふる所の人に隨うて變化すべ

し。

假體・托體　假りに設けて軍執たるもの托體は實意のもの。假體と相似たり。

解の師　蠻の軍勢を云ふ。

▲紀事　○紀事並解

紀事並解

紀は其實を紀するものなり。其體略傳紀に同じきも、今暫く別項にしたり。是にも亦傳紀に類して假體あり、托體あり、れ伽噺の如きは、みな此體に屬す。中井履軒・紀俗傳

猿島復讎事文に曰く、

經四十有七年春玉の六月丁戌、大に雪る。夏七月、解の師、袁を伐つ。甲亥、袁に入り、袁侯を獲。戊丑、袁侯を解山に用ふ。秋十月、傳四十七年の春、大に雪る。時ならざるを書す。七月解、袁を伐つて袁侯を獲しは、讎を復するなり。初め解子の未だ生れざるや、其母野に逝

一顆　ひとつ。顆は小さき丸き物を數ふるに云ふ語。

龜に中り　背骨に當ること。

麻石　ひきうすを云ふ。

く。袁侯の樹上に在りて、柿を食ふを見るや、從うて一顆を請ふ。袁猴怒り、未だ熟せざるものを擇びて之に投ず。龜に中り、甲破れて卒す。解子胎方に盈つ。闕より出で、匍匐横行して歸る。長じて勇を好み、擊劍を善くす。恒に目を弩し手を戟して、罵りて曰く、袁侯は親の讎なり、我れ必ず之を復せんと。罵る毎に未だ嘗て噴沫せずんばあらず。歲々に黍を峙へて粮となす。是歲大に雪り、柿實なし。袁侯大に饑ゆ。是に於て師を興す麻石、諸に途に遇ふ。問ふ、將に何くに之かんとするやと、解子曰く、袁を伐ち讎を復せんとするなりと。齋す所のものは何ぞと。曰く、黍團なり、天下の最たりと。

孔して入る　かべに穴をあけてはいる。

門む　門口より攻むるを云ふ。

栗山　讃岐高松の大學者。

麻石從はんと請ふ。之を許す。牛異金聶金咸栗子も亦至る。之に謂ふ初の如し。皆從へり。壬酉に袁を圍む。金咸栗子と、夜壁に孔して入る。金咸は衾中に匿れ、袁侯を刺し、栗子は其爐に爆す。袁侯一夕に三遷す。丙丑、解子親ら師を以て門む。牛異は門側に伏す。麻石金聶先登す。袁侯懼れ、奔らんと欲して方に門を出づ。牛異に遇うて滾す。麻石下りて之を壓す。金聶これを挾み、其指を去る。解子劍を揮ひ三擊して之を剄ね、遂に袁族を滅す。戊丑、袁侯を用ゐて、以て其母を祭れり。

右は漢文を和譯したるものなれども、其體は正しければ模範とすべし。又、柴野栗山の紀那須與市事の文には、

來歸 來りて配下となること。

艶裝 美しくかざること。

既にして阿波讃岐、平氏に叛きて源氏を待つ。所在の山洞、往々にして十騎二十騎、相將て來歸し、判官の兵三百餘に及べり。當日日暮に向ひて、勝を決すべからず。源平交兵を收めて退く。海上に一の小舟を艶裝し。岸を望みて搖かし來る。岸を距ること七八段、轉じて舳を横へて止る。源軍疑うて視る。舟中に宮娃を出す。年十八九ばかり、綠衣紅袴、純紅扇の旭曦を畫くものを開き竿に挿み之を船頭に樹て、岸に向うて招く。判官後藤實基を召し、問うて曰く、彼は何を爲さんと欲するかと。對へて曰く、是れ應に我をして射らしむべきなり。臣章ふに、或は將軍進みて箭道に當りて、姫妓を觀翫せば

巧狙云云 うまくねらひて射殺さんとすることの義。

賭射 物をかけて射ること。

二十左右 はたち前後。

扇の正中 扇子のまんなか。

則ち巧狙して射落さんと欲するなり。但扇は射らしむべきものに似たりと。判官曰く、我軍に能く射るべき者は誰とするかと。對へて曰く、巧射固に多し、就中、下野國の人那須太郎資高の子與一宗高なる者、力稍劣ると雖も、而も手は則ち巧利なりと。判官曰く、徽あるかと。曰く、諾と。禽鳥を賭射する、三は必ず二を得ると。乃ち命じて之を召す。與市尙二十左右の男子なり。茶褐戰袍を被、紅錦飾の襟袂、靑緇甲を擐き、白帶刀を佩び、背に一箙を負ふ。二十四枚の斑羽箭、鷹羽の鳴鏑一枚を加挿す。繳纏漆弓を腋にし、鎧を脱し鎧紐を繫け、進みて馬前に跪く。判官曰く、宗高よ汝扇の正中を射、

弓矢の恥
ゆみやの名をれ。

毫も枝梧
すこしにても異存ならばとの義。

金稜鞍云云
金ぶくりんの鞍を置くを云ふ。

敵軍をして寓目せしめば、則ち如何と。辭して曰く、臣自ら料るに能くすべきを知らず。若し誤り射らば、則ち永く我軍弓矢の恥とならん。請ふ更に定めて能くする者に命ぜよと。判官大に怒りて曰く、此行鎌倉を發し、西國に赴く者、其れ豈に義經の令に違ふべけんや。若し毫も枝梧を存せば、須らく速かに鎌倉に歸るべしと。與一私かに謂へらく、若し再び辭さば、恐くは惡意とせんと。乃ち曰く、然らば則ち其逸は臣敢て知らざるなり。既に命あり、請ふ之を嘗試せんと。乃ち起つ。鐵驪肥健金稜鞍を架し、以て之に跨り、頓弓を整へて手に在り、轡を促し、汀に向ひて歩せしむ。我兵目送すること之に

一段ばかり
一町許と云ふに同じ。

凝視す
見つむること

自裁
自殺に同じ。

久しうて、言うて曰く、此壯夫定めて能くせんものと。判官も亦視て委く人を得たりとするに似たり。既にして的道稍遠し。馬を驅り海中に入ること一段ばかり、扇を距ること猶七段遠近あり。時に二月十有八日、日已に西を加ふ。會北風頗る烈しく、高浪岸を打つ。船乍ち陷りて漂泛す。扇も亦竿に安んぜずして閃曜す。海面には則ち平軍一行舳を列して目を注ぎ、岸上には則ち源軍轡を並べて凝視す。極めて顯塲の盛事たり。與一目を閉ぢ默禱して曰く、南無八幡大菩薩殊に、我國日光權現、宇都宮那須の湯泉大明神、請ふらくは夫の扇の正中を射らしめよ。若し事を誤るあらば、弓を折りて自裁せん。面再

び人に向くべからず、神一たび本國に歸らしめんと欲さば、此矢逸せしむる勿れと、既に目を開けば、風粗恬に扇射を容る、もの、如し。乃ち鳴鏑を取りて架上し、引滿して發す。然し劣力と雖も、而も十二拳の飛鏑浦に響きて長鳴し、扇の眼上寸許を射斷して、餘力遠く去りて海に入る。扇は則ち揚りて空に舞ひ、春風に翻弄せらるゝこと一再、颯然として海中に散落す。純紅の扇、夕日に映じて白波に委し、浮沈泛々たり。舟師は舷を擊ちて賞讃し、陸軍は艘を鼓して歡呼す。

引滿　滿月の如く十分引きしぼりて矢を放つこと。

翻弄　春風にひらひらとあがるを云ふ。

龍王と猿との事を紀す

龍王、頃病あり、侍醫診して曰ふ、猿の膽を服しなば、病立ろに平癒すべしと。王乃ち左右を顧みて曰く、誰か猿公を生擒する者ぞと。言未だ畢らざるに、龜遙かの末座より進み出で、臣願くは計を以て彼を召連れんと云ひ、王に辭して直に海岸に至り、一猿の樹上に戯るゝを望見し、呼んで曰く、龍宮城内に大宴あり、蓋ぞ來りて其饗に與らざると。猿公曰く、赴くに意なきに非ざれど、遙けき海路を如何にすべきと龜曰く、其事にしならば、請ふ憂ふるを休めよ、且つ余が背に乘れよと、猿公輙ち其背に騎りぬ。龜は勇ましき足搔に波

侍醫診して　おつきの醫者が脈取りて見て。

生擒　いけどること

其饗云云　ごちそうにはならぬぞとなり。

瞬時に　わづかの時間に。

私語云云　耳に口寄せて小聲にて言ふには。

酒池肉林　酒肴の多き形容。

を排け、進みに進みて瞬時に龍宮城に達せりき。宮城の結構壯にして麗、珊瑚の柱に珠玉を鏤め、善盡し美盡せるを一見し、目ために眩し膽ために落つ。龜は、猿公を城の門前に待たせ、獨り先づ入りぬ。門衛の海月、猿公に私語して曰く、請ふ戒心せよ、膽を奪はる、勿れと。猿公大に驚きしも、其好意に謝して曰く、諾と。既に導かれて、王の前は至れば、所謂酒池肉林、侍する美人の數多く、鼓うつ河豚姫、琴を奏づる鯛姫、歌ふは絲より姫、舞ふは小鯛姫、世にも稀なる盛宴、春風徐に珠簾に上れば、ゐならぬ奇香滿座に薫じ、庭には名知らぬ美しき花の咲き亂れ、山の春とは又格別の眺めなりけり。

献順云云　称のやりとり（一時の過ぐるを云ふ。）

失聲云云　聲をあげて大に泣くこと。

促せば　早く〳〵とせけば。

猿公は、遠路の客なればとて、美姫に擁せられて上座に就き献酬に時刻移り、宴いよ、佳興に入れば、月は高う上りて四邊を隈なく打ち照し、眺めも亦いよ、奇しかりしに、更に風情を添へん爲にや、寒からぬ程細雨蕭々とし降り出でぬ。折しも興に入りし猿公、忽ち失聲して泣く。一座怪しみて其故をすかし問ふ。猿公は此處ぞ命の種と僞りて曰ふ、僕こゝに來るさに、膽を樹上に遺れぬ、故に其雨に濡るゝを悲しむなりと。龍王は目的の膽遺れしかを信じ、還りて再び携へ來らしめんとす。茲に於てか復、龜背に乘りて海岸に至り、躍りて樹上に登り、時を移せども下らず、龜これを促せば、眞紅なる尻を撫し、冷笑して曰ふ、龍王愚なる哉、愚なる哉、吾

悄然　しょぼ〳〵としたる形容。

糾官云云　裁判官が其事をきんみしたる處が。

是非鑑別　よしあしのみわけ。

れ豈に膽を奪はる、の愚をなさんやと。龜、是に於て始めて欺かれたる事を知り、悄然として還り事の仔細を告げ、且つ曰く、今日の事あるは蓋し、門衛海月の他言に基せんと。糾官之を鞫せしに、果して實を得たり。是に於てか龍王大に怒り其骨を碎きて流罪に處しぬ。海月、骨を碎かれて歩する能はず、唯波のまに〳〵搖動せらるゝのみ。

たゞ話先生曰く、世には龍王多く、龜、猿公、海月その人にも亦乏しからず。萬物の靈長たるものは、最も注意を拂ふべき一の寓意談に過ぎざれども、龍王必ずしも驕りたるにあらず、龜必ずしも、愚なるに非ず、猿公必ずしも智あるにあらず、海月必ずしも反側子ならず、是非の鑑別は其人に存す。

隱すたゞ云ふ　雷の鳴ならを云ふ。

性頗る懶　生れつきが大にふしやうなること。

日と月と雷との旅行

日は晝に輝き、月は夜に照る。其東に出で西に入ること、古今に亘りて、未だ嘗て怠らず。雷は時ありてか能く鳴り、時ありてか蟄す。余をして言はしめば、雷は未だ全く勉むるものと謂ふべからず。俗に傳ふ、或年、日と月と雷と相約して世界周遊を試みたりき。日は夜明に宿を出で、夕には必ず宿る。月は夕に出で、夜明に至れば必ず憩ふ。雷や性頗る懶、夙に起きざること有り。夜を犯して行くこと有り。而も常に後て、日月と共にするを得ざりき。是に於て、雷公歎じて曰く、日月の去る、何ぞ其疾きやと。記て以て、世の雷たるものを戒む。

紀議　書きしるすこと、識は高しなり、

題するも　書きつくるも

題名並解

題名とは、寺に遊び又は山に登りなどして、其登臨尋訪の歳月と其同遊の人とを紀識すると云ふ。事を叙するには、簡にして贍なるべく、其筆を執ることは、健にして嚴ならざるべからず。是れ亦文の一體にして、記文と同視して可なるも、其主とする所は、登臨尋訪の歳月と、其同遊の人とを記するに在ることを忘るべからず。彼の巡禮が靈場に札納むるも、亦此類として見るべく、社寺の門扉又は柱楹訪ひし年月日と姓名を題するも亦固より相同じきなり。見よ、古今名山勝境、其他觀るに足る社寺なきに非ざるも、

住題云云　よき題名の文が少なしとの義。

歷る所　經驗する所へきたること。

世人往々此體を忽諸にするにより、佳題多しと云ふを得ず而も此文を以て易しとする勿れ、古今その佳題に乏しきは要するに易からざるが故なり。蘇東坡の題雲安下嵓の文に曰く、

子瞻子由侃師を此に至る。院僧、路の惡しきを以て止めらる。僕の歷る所、此に百倍するものあるを知らず。丁未正月二十日書す。

年月日を記せざるものなきに非ず、韓退之が長安慈恩塔題名に曰く、

韓愈退云、李翺習之、孟郊東野、柳宗元子厚、石洪澹川同じく登る。

▲題名　○題名並解

と。山陽之を評して曰く、同登の二字、千景萬情を包括すと。時としては百字乃至二百字のもの無きにあらざるも、是等は變體とも云ふべく、多くは數十字なり。遊記文を草するの餘暇、學ぶも亦益なしとせざるなり。既に文と云ふからは、多少の曲折趣味を少數文字に含蓄せしめざるを得ず。只僅かに同遊者の名と年月日とを記するを以て、體を得たりとすべからず。其容易ならざるもの、豈に輕々しく例を擧げうべき。暫く之を缺く。

包括　くるめこむこと。ふくますこと。

▲樓記　○樓記の解

樓記並解

樓記と云ひ、亭記と云ひ、臺記と云ひ、廳堂の記と云ひ、園記と云ひ、何れも皆記に屬す。凡そ記は、事を記するの文なり。然るに單に叙事に、止まるあり、議論を主とするものあり。或は一半は叙事にして、一半は議論なるものあり。また物に托して、意を寓するものもあり。蓋し、是等は、記文の正體なり。其別體としては、韻語を以て記するもの、或は篇末に詩歌を付するものもあり。若し夫れ、其題は云はゞ某の記と曰ひ、某を記すと曰ひ、其題の名同じからざるも、體製に於ては毫も異ならざるなり。この體の

單に　ただと云ふ意味。

體製　禮格と云ふに同じ。つくりかた。

便ち妙觀 そこで面白きおもむきをなすとの義。

面白き筆致 趣味ふかき書きぶり。

文、議論を着くれば、其文體に叶はずとするものあるも、決して然る理なし。たよそ名勝山水を記するに、景物を點綴し、併せて情を叙べば、便ち妙觀をなし、毫も議論を要せざるべきも、廳堂又は亭臺、園記の如きに至りては、景情の外、議論を着けずば、何を説きてか文を成すべきぞ。故に記文は、單に叙事、叙景、若くは半議論、半叙事、時として中間に小議論をはさみ、以て一章をなすべく、要は題に應じて適當ならんことを期すべし。殊に樓記などは、其由來、又は其名の起る所以、樓と名と相副ふことなど、とり〳〵面白き筆致を望む。

遊記、叙景、叙事などの記文は、之を時序の部に四季に分

欣然云云 如何にも嬉しく思うて起ち行きしとなり

積水以下 月夜の景を叙す。

竹柏 樹の名。なぎ

ちて掲げたるも、左には蘇東坡が記承天夜遊の文を擧げ、以て例とせん。

元豐六年十二月十三日夜、衣を解き睡らんと欲せしに、月色戸に入る、欣然として起行しぬ。念ふに、與に樂しみをなすものなしと。遂に承天寺に至り、張懷民を尋ねぬ。懷民も亦未だ寢ねざりき。相與に中庭に歩すれば庭下積水空明、水中の藻荇交横はるが如きは、蓋し、竹柏の影なり。何れの夜か月なからん、何の處か竹柏なからん。但閑人吾が兩人の如き者を少くのみ。

と。但以下一句は、正しく是れ議論なり。されど、記文には必ず議論の筆を要せざること、既に前にも叙べたり。古

群芳を評し　多くの花の品評をすること

以爲く　おもふには。

第二等　第二流と云ふに同じ。

賀侗庵の桃花園記に曰く、唐の皮襲美群芳を評し、桃を以て第一とす。夫れ桃花は標致固より凡ならず。然れども、襲美の言は、則ち好む所に阿るに似たり、古來桃花を稱揚するもの多し、史遷が蹊を成すの語、半山が炫晝の句、紅霞紅雨の喩、艶外の艶、華中の華の賦の如きは、以て其美を盡する足る。而して余は則ち、更に其實の世に益あるを取り、以爲く將に其華實兼備を以てして之を賞せんとす。彼れ百世中に在りて、奚んぞ嘗て第二等に落ちんや。惟人も亦然り文は華なり、質は實なり、德は實なり、才は華なり、才德備り、文質合ひて、然る後に君子と稱す。一を闕けば

記を徵す　桃花園の記文を求む。

過慮　俗に謂ふ所の思ひすごし。

紫溟　九州の別稱。

則ち不可なり。米澤の宮島恭卿城下に家す。園に桃多し因りて桃花園と名づけ、圖にして寄せ示し、記を徵す。恭卿は、學博くして行修り、野ならず史ならず、予が言を勞することなし。然りと雖も、予の過慮するは、猶其華を先にして實を後にし、文勝ちて質散じ、時俗靡々の風を追はんことを恐る。故に桃花を評するに因りて、縱言此に及ぶ。園は兜鍪山を前にして、堀楯川を右にし、勝景一つにあらず。恭卿の錦心繡口、必ず其詳を賦し盡すこと、予が臆料の辭の萬一を加ふべきにあらず。故に道はず、文政戊寅の秋八月。紫溟劉煜撰、と。議論にして、而も教訓の意を寓したるの文なり。明の

數あるか
天命あるかとなり。

南偏に云
南端の地を見立て、高樓を築くを云ふ。

劉青田が横碧樓の記に曰く、

天下の佳山水、在る所に之れ有り、天地有りしより以て人に迄りて、地改め作らず、或は久しく晦して始めて彰る、其れ數あるか。抑も亦人に繫るか。故に蘭亭は晋に顯れ、盤谷は唐に顯る。乃ち右軍の記、昌黎の序と不朽を相爲す。物の遇ふや。果して人に待つあるか。會稽山の柯橋は、即ち古の柯亭なり。寺あり、靈秘と曰ふ。上人あり、守基と曰ふ。其山水の佳、人の稱する所に讓るものなきを愛して、其東山雲門と並に時に揚る能はざるを惜む。乃ち其南偏を相し樓を作る。群室の上に出づ之に憑りて覿れば、山の峙つもの蒼然たり。之に附して

淵然
深き水の形容

甲觀
第一の眺めとの義。

色をなす
景色をなす。おもむきをなすとの義。

矚れば、水の流るゝ、もの淵然たり。或は廻きて馳す。龍の如く虎の如く、蛟の如く蛇の如く、或は廻きて高く、或畑の如く雲の如く、藍の如く苔の如く、帶の如く屏の如く、遠近高低、縈紆蔽虧、擧げて一覽を逃けず。是に於て其地遂に甲觀となる。恨むらくは高世の人、爲に之を發するあらざりしを。至正甲午、用章師浙西より來り、過りて之を奇とす。其山水の美を兼ぬるを以て、山と水と皆碧を以て色をなす、故に其名を命じて横碧と曰ふ、予に之が記を爲らしむ。師は今世の高人なり、予是に於てか、斯樓の遇これより始るを喜ぶ。予文聞く、柯亭に美竹あり、笛に爲るべしく。風清く月明かなるとき、樓

▲樓記

鳳凰云云
笛の曲の妙なるに云ふ語。

水樓
水邊に在る高樓を云ふ。

○樓記の解

に登りて一吹せば、以て鳳凰を來し、蟄龍を驚かすべし眞に奇事なり。上人之を能くするか、吾れ將に往きて觀んとす。

と。是記も議論を以て起し、中ごろに景を叙したり。又、松尾芭蕉の十八樓記に曰く、

美濃國ながら川にのぞみて水樓あり、主を加島氏といふ稲葉山後に高く、亂山左右にかさなりて、近からず遠からず、田中の寺は杉の一むらにかくれ、岸にそふ民家は竹のかこみのみどり深し。曝布處々に引はへて、右に渡し船浮ぶ。里人行かひしげく、漁村軒をならべて、網を引釣たるゝたのがさまゞゝも、只此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るゝばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝ簾の影もや、近く、高欄のもさに鵜飼するなど、誠に目ざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八ツのながめ、西湖の十の境も、涼風一味のうちに思ひこめたり。もし此樓に名をいはんとならば、十八樓ともいはまほしきなり。

此あたり目に見ゆるもの皆涼し

此一篇、樓記の如何なるものなるか、能く之を知りやすかるべし。余が示せる作例は、僅かに二三章、しかも手本とするには、固よりかひなし。諸氏は自修して其奥堂に上るを要す。

▲樓記

暮がたき
永き其の日の形容。

瀟湘云云
瀟湘八景と西湖十勝を云ふ

自修
獨學することを云ふ。

○樓記の解

扁して　額に書して云ふこと。

嘉木名花　よき樹木や花

釣詩　酒の別名を釣詩鉤と云ふより云ひし語

釣詩窩の記

余、居を城北に移し、扁して釣詩窩と曰ふ。客を迎ふるも此處、書を讀むも此處、食ふも酌むも寢ぬるも亦此處、庭に目を慰むべき嘉木名花なく、耳を洗ふべき清泉玉池なし。只僧寺に隣りするを以て、朝夕に聞く鐘聲に心を澄す。また數株の古松、一叢の幽篁、雪に風に月に、詩を獲ることなしと爲す。釣詩は、獨り酒のみに限らざるなり、是れ題する所以。

萬景樓記

余が友某、近來一樓を起し、扁して萬景樓と曰ふ。蓋し、其

一日云云　或日酒を携へて訪問したが

波際云云　波ぎはに見ゐかくれするは

渭川の富　竹の多きを云ふ。渭川は竹の名所。

景の多きに取りしとなり。余一日、樽を載せて訪ひしに、直に樓上に延き、所謂萬景を見せしめんとす。簾を捲けば、蒼海忽ち眼に入る。友曰く、天水茫々として相接するはては朝鮮なり。天晴れし日は、時に或は對馬を見るも、今日はしも見ゐず。左に夢の如く、波際に隱見するは五島なり。近く白帆に隱れ、今し其半をあらはさず、沖の小島なり。右に一點の青螺浮ぶは、生月島なり。西のかに双岩突兀として天を支ふるは、夫婦岩にして、津和嶽の絶頂なり。彼方に渭川の富を貯ふ島嶼は、竹子島なり。若し夫れ冬になりて海荒るれば天を洗ふの怒濤、雪の山を成して打ち寄せ、雄偉比なきも、彌生の此頃は、たゞ其說くのみなり。更に南を指點して曰く

▲樓記 ○萬景樓記

三舍云云 しりごみすることて。劣さとさべにの義。

麥浪 麥の風になびくさまを浪に喩へて云ひ。

らく、彼は某山にして雪に勝を得るもの。彼は某山にして瀑布に名高く、而も紅葉を以て著れ、都近からしめば、箕面も三舍を避くてし。彼は某森なり、白雲の棚引くが如きは、今眞盛の櫻花ぞやと。又樓下を指點して曰く、黃にして金しきつむるが如きは、菜花なり。蒼海の觀をなすは、麥浪の寄するなり。松林一帶、墨繪の如く、なかば薄霞かゝれるは、縣道の並木松なり。平野に白蛇の蜒蜿たるが如き、某川なり。春にして既に斯の如し。夏は涼しき眺め、秋は月に宜しく、紅葉の勝にも貧しからず、冬の雪景は言はずもがな。君よ、晝にして尙然り、其四時に於ける朝と冬との景、一々語るべくもあらず。又、一々筆にすべくもあらず。區して萬景と曰

相副ふ ふさはしとにて適當せりと云ふ意。

眼前の景 見たまのけしき。

風情 おもむきなり情趣。

ふ、其多きに取りたりとするも、亦以なきにあらざるべしと萬景の二字、樓の眺望を相副ふ、余終に服す。此記、僅かに眼前の景を筆にしたるに過ぎざれども、是も亦萬景樓の片影とするを得べき乎。其朝や夕の景に至りては、之を他日に待たんとす。

吾が書齋の記

地たる小川に枕み、小丘を負ひたれば、花紅葉の眺めなきにしもあらず。わきて彌生は景色めでたく、丘の彼方此方に、櫻の雪と亂れ咲きたる、朝日に宜しく、夕月にも亦風情ふかし。川に沿ひし柳の綠のうち烟りたる、畑に菜花の黃金を欺

▲樓記 ○四宜亭記

畫數云云 繪の如きものばかりとの義

貧しき云々 文にたくみならぬとの意。

美觀 うつくしきながめ。

ける、一として畫致ならぬはなく、鳥の鳴く音も蝶の戯る、影も、皆活ける詩とも評すべし。世人動もすれば、都の賑しきを羨めど、吾は此地の靜閑にして、紅塵の來り犯さゞるを喜ぶ。あはれ書齋、僅かに膝を容るゝに足り、東面して眺めよろし。春の夜は、先づ櫻の花より明けそめて、柱により朝日迎ふる心地よさ、言はんかたなし。凡そ四時の眺望に富ますことせざれど、貧しきは言葉にて、そを精しく記するに筆ぞなき。

四宜亭記

櫻は春に於ける第一の美觀なり。樹は大にして花咲くこと早く、その爛熳たるに至るや、之を遠きより望めば、縹緲として白雲の棚引くが如く、近く來れば艶雪目を奪ふ。獨り予が心を慰むるのみならず、人の來り賞するにまかす。朝日に映ゆるも宜しく、朧月宿すさまも宜しく、散さぬまでに降る晝も雨は、幽なる眺めなり。若し夫れ、微風吹けば、時ならぬ雪一片二片、青苔に點じて消ねず。狂風來れば、篩ひにふる花吹雪、最も奇觀なり。

爛漫 咲き亂れたる形容。

艶雪 花の形容に云ふ語。香雲と云ふに同じ。

狂風 あらし。おほかぜ。

松は夏に於ける第一の涼味なり。三伏の眞晝を書齋に臥すれば、颯々として波の音を枕上に送り、其ゆるやかなる時は、琴瑟を鼓するが如く、之を夢幻の間を聞けば、恰も天女の樂かと疑はる。松涼しくして夏人を健にす、とは古人の句なら

概なきも おもむきは無きも。

消夏 あつさわすれ

孤枕 ひとりねのこと。

すや。吾れ殊に此樹を愛す。彼の赤松は五千丈、其一丈毎に一雲生ずとの概なきも、萬壑の風泉を想ふに足る。白雨後のたもむき、夕の月のは云ふまでもなき事ぞ。若し夫れ、涼しさを説かば、暗を縫うて流るゝ螢火、雲破りて過ぐる杜鵑、みな是れ消夏の料ぞや。

蟲は秋に於ける第一の幽趣なり。昨日の暑さ今しがたの雨に洗はれしとせよ。眉よりも細き新月、西天の一角に掛れりとせよ。涼しき風の庭の小萩に音づるれば、いつしか語り出し蟲、其語の多からざる殊に嬉し。夜更くれば牀近う鳴き、そぞろに吟興を催す。之を聞く、雨の夜の孤枕に宜しく、書燈の下に宜しく、水よりも清けき月の光りに宜しく、竹縁にて

西風 秋風のこと。金風とも云ふ

性の云云 性質の好む所にかたよりて蟲を第一番としたのかとなり。

不可 よからず。わるし。

の晩酌にも亦宜し。初秋のは聽きて興多きも、西風吹き老いし頃のは、身征人ならずとも心細き思ひす。されど亦棄てがたく、詩趣殊に深し、吾が家、月の眺めなきに非ず、紅葉の觀なきにも非ず、而も蟲を取れるは、吾が性の嗜好に偏せるものならん。

雪は冬に於ける第一の景色なり。我郷にての雪、珍しきものに非ざれども、特に小富士の初雪愛づべく、二八乙女の淡化粧したるにも、比すべくや。而も吾が書樓、遠く相對して眺め最も宜し。是れ吾が四宜の一に選したるにて、若し其地を換ふれば則ち不可なり。松原の時雨、瀑に垂る、大氷柱、亦冬の勝の一つに算すべきぞ。

林泉の美　其園の葉山泉水等のよきを云ふ。

甲たり　第一なりとの義。

武を云云　武力を振ふこと。

某公園記

公園の貴き所以、蓋し四民の別なきに在り。況や林泉の美、花卉の賞すべきもの有るに於てをや。又況や、舊藩侯の別館にして、武を演じ文を講ぜる所なりしに於てをや。此處、四時の觀一として宜しからざるなきも、花は之が甲たり。地域廣濶、遠く青山を遶し、近く野水を帶び、南に港を控へ、西は直に市街に接す。古の所謂山河襟帶の要害、守るに易く降すに難く、兵家必爭の處、城樓今に尙雲に聳ゑ、國の一隅武を輝かせるを想はしむ。一日、雲雀の聲戴きて訪へば、好花參差として相續き、黃鳥宛轉として相和す。樹あり、就て

遊鱗云云　遊魚が見ゆるを云ふ。

香雪云云　花の咲き亂れてゐるを云ふ

監視云云　見かじめが嚴しくして遊人の自由にならぬ。

憩ふべく、樓あり、就て醉ふべし。池あり、清泉の涌く處、遊鱗數ふべく、細波縠紋を織る處、鴛鴦夢暖かに、白砂岸に接する處、仙鶴翅を歛めて立つ。其周圍に香雪を漲すは、爛漫たる櫻花にして、青きは數株の古松のみなり。橋あり、長さ三間許、題して某橋と謂ふ。橋を渡れば、藩祖を祀れる某祠に詣づべく、左すれば小丘の上に達すべし。祠は最も花の多き處を占め、丘は眺望に宜しき處、四境山川の勝を一眸に收むべし。凡そ此園の勝、自然にまかせ、人工に假るもの少なし。故に逍遙の際、うた、幽趣の深きを覺ふ。世に公園と稱せらるゝもの、監視頗る嚴にして、其實なきもの往々に有り。我鄉の某公園は、則ち然らず、人の遊ぶに任せて門を

一小些事云　言ふに足らぬもの事との意義。

餘澤云云　めぐみが今に殘るとの義。

三公園　亞公園偕樂園後樂園の三。

鎖すなく、朝の風に衣を飜すべく、夕の月に歩を運ぶべく只花を折ることを許さゞるのみ。是れ一小些事に屬すと雖も假令世代情を異にすると雖も、以て藩祖祀政の端を窺ふに足る。宜なる哉、某公城市を開きしより、明治維新に至るまで八百餘年、常に大國の間に都し、未だ曾て一指をして觸れしめず、文武四境に輝く。餘澤今日に及ぶ、決して偶然にあらざるなり。終に記と爲す。

岡山の三公園記

岡山は、池田公三十萬石の舊城下、市坊九十四、戸數一萬七千餘、廣島と伯仲の間に在る大都會。もとの天守閣

左傳に云ふ大藩なりし事が想ひやらるゝと云ふこと

班する　其一に加はるとの義。

掌大の地　狹き地のこと

は尚雲に聳えていかめしく、當年雄鎭の面目を留むる亦床しからずや。雅名は烏城、其由來不詳なり。城と共に有名なるは、日本三公園の一に班する後樂園なれども、他に亞公園と偕樂園とあり。旅路半日の遊、其一々を記し得べくも有らざれども、筆携へて訪へ。

亞公園

此處、掌大の地に過ぎざれども、山を築き池を穿ち、四季とり〴〵の花卉を栽培し、以て一段の風致を添ふ。中にも梅と櫻とに名有りて、菊にも亦貧しからず。處々に酒閣あり、茶寮あり、皆瀟洒たり。遊ぶものは醉ふに足り、醉はゞ醒すに

▲樓記　○岡山の三公園記　千三百十

閑を云云
ひまつぶしに遊ぶによき地と云ふ事。

眼を云
眺望のよきを云ふ。

眼界ひろく
見晴しの廣きを云ふ。

宜しく、酒となく茶となく、客の呼ぶ儘に運ばれて、半日の閑を消すに適す。園中に眺望閣聳ゆ。八角形にして七層の結構、高さ一百尺、登るには螺旋狀の階梯を設けらる。而して一層毎に、美術的の品より、日用雜貨を鬻ぐ。よぢに攀ぢて階盡き、漸く最高の處に達すれば、全市を蹈まへて四圍の耕地を望み、青山以て眼を清うするに足る。閣に名づくるに眺望を以てする、決して誣ひざるなり。

偕樂園

園は操山を占む。山は一堆の丘陵にして、縣道坦として其中央を貫き、左右は田圃遠く相連なりて眼界ひろく、滿山には

人間云云
塵世の遠ざかる心もちがするとの義。

戊辰役
維新の頃の戰爭。

西南役
西郷隆盛の戰爭。

老杉亭々として聳ゆ、古松蒼々として秀で、人間遠き心地するを、雜ふるに櫻樹數百株を以てしたれば、花時の艶なる眺めは言ふにや及ぶ、來り遊びて神を慰するには、何ぞ時候を嫌ふべき。げに、偕樂の意に副へり。中腹に三勳祠鎭す、祭れるは和氣清麿、楠正成、兒島高德の三忠臣なり。其南に隣りて東照宮、玉井の宮あり。招魂社も亦此處にあり、戊辰役及び西南役に死せる忠魂を祀る。山上より展望すれば、西に旭川の流れ清く、そを隔てゝは岡山の粉壁碧瓦、一々指點すべし、北は一帶の連山波濤の如く、春は霞に臥するの姿優しく、夏は雷雨の景奇しく、秋は氣澄みたれば最も眼に入りやすく、冬の雪殊に宜し。南は十里の平野をかすめ、兒島灣

▲樓記　○岡山の三公園記　千三百十一

人工林泉 人の力になれる庭園。

聞ゑ 名高きこと。世に評判さるゝこと。

▲樓記　○岡山の三公園記　千三百十二

の蒼波を望み、旭川に上下する白帆、鷺の飛び交ふに似たり若し夫れ、人工林泉の美に至りては、固より後樂園に及ばざること遠しと雖も、天然の勝は却つて此園に存す。地は三耀に屬す、山に命じて操と云ふ、蓋し地名に因める乎。

後樂園

語に曰く、天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂しむと。此園の名、蓋し此に基づくなり。水戸の偕樂園、金澤の兼六公園と共に林泉の美を以て聞ゑ、世稱して日本の三大公園といふ。此園や、清き流れの旭川に臨みて、夙に一區の勝をなし、面積二萬七千餘坪、地形は南のかた稍高くして丘

修竹云云 長き竹の多きを云ふ。

千章 千本と云ふに同じく老樹の多きを云ふ。

落成 出來あがること。

狀をなし、修竹萬竿、老樹千章、幽徑苔厚く、一たび歩を入るれば、恍として深山幽谷の趣あり。東北隅は平坦にして松下に逍遙すべく、園外の野色をも縱にすべし。中央には大小の池を穿ち、鶴は沙汀に人立し、遊魚は碧波に喰喝ひ、周圍には芝草みどりに、路は或は曲り、或は直く、水に沿ふも有れば、林に入るも有り。亭あり、以て憩ふべく、泉あり以て口すゝぐ可し。世の紅塵堆き處の公園と、同視するを許さゞる此處よ、もと池田綱政の開く處、貞享三年に起工して、數年を閲して落成す。其後元祿年間に至り、大に區域を擴張し、以て今日の素を成す。當初は御茶屋敷と呼び、後には單に後園と稱し、その後樂園の名を付し、民衆遊觀の地と

淙々たる　さらさらと水の流るゝ形容

徘徊する人　ぶらつく人散歩する遊人。

假寐　古松の逞しき形容。

せしは、明治四年の頃とぞ。園内の勝は、よく吾が筆の記し得べくもあらざれど、先づ日記に上りしは、

鶴見橋なり。此橋よ、長さ七十間の木造、其下は淙々たる旭川の清流にして、東北は遙かに曠野を隔てゝ、連山翠屏を展ぶ。市より後樂園に遊ばんとする客は、必ず此橋を渡らざるを得ず。渡りて右すれば園の北門に達す。此ほとり最も納涼に宜しく、三伏の夕に徘徊する人多く、月の影明かなる地には、人影婆娑たるを想はしめぬ。

鶴鳴館は、草葺の建物、園の北門を入れば右に得たり。先づ目につくは、假寐たる一株の古松にして、蒼翠白沙を染めんとし、秀色餐すべし。此館、廣さ百四十坪、二ケ所に玄關

宴集　酒宴のより合ひ。

掌上云云　手近く一目に見らるゝと云ふ義。

饗宴　酒食を以てもてなすこと。

を設く。一の公會堂ども稱すべく、縣會も此に於てせられ、盛大なる宴集も亦こゝを充つること多し。

延養亭は建坪七十七坪餘、鶴鳴館に隣れり。直に舊城の天守閣を仰ぎ、瓶井山の三屋塔を雲外を望み、坐しては園中の諸勝を掌上に弄すべし。庭には栽うるに老樹を以てし、之に配するに奇石を以てす。而して沙白く苔青く、仙禽は徘徊して畫の如く、閑雅風流の趣、能く人をして詩化せしむ。舊藩時代は、近國の諸侯及び其使臣等を延き、以て饗宴せし處たり。明治十九年　聖駕西巡の際には、亦此亭に　玉座を設けたり。其結構、其歴史、其眺望も共に、國中第一と評すべし。遊人は、等閑に見る勿れ。

廻廊 まはりらうかのこと。

奇趣 めづらかなるおもむき。

紙障 しやうじのこと。

望湖閣 又の名は榮昌と云ふ。

○望湖閣は、延養亭の西北に接し、こけら葺の廻廊を設けて斜に相通ず。建坪五十七坪、席の廣さ七十疊、一に榮昌とも云ふ。閣の東南なる池を花葉と名づけ、池畔に巨岩立つ。其岩の高さ四間餘、圍十三尋、中腹に古松生じて枝伸ぶる、奇趣ふかし。更に北に廻れば、一の舞臺を得ぬ。寶永四年の建築にして、建坪四十六坪餘のこけら葺、其三面には數十坪の餘地を存し、敷くに小石を以てす。樂を奏する時は、望湖閣北方の紙障を開き、坐らにして之を觀得べく作らる。

○花葉とは、望湖閣の南なる園の名、同名の池も亦有り。其北には門を設け、直に西門に通ず、花葉口といふは即ち此處なり。此ほとり地形自ら高く、丘陵の狀を成し、修竹は之が

清風云云 地の幽にして涼しきを云ふ

結構素樸 造作が飾らざることゝ。

錦繡云云 紅葉を形容せる語。

圍たり、喬樹は之が天たり。千古の碧苔は深く細徑を封じ、墜露珊々として衣襟に滴り、夏の眞晝も尚清風を貯へ、人をして能く三伏の熱を忘れしむ。花葉よりして、一線の徑をたどれば、

○茂松庵に達しぬ。庵は廣さ二十二坪、結構たるや素樸。相傳ふ、舊藩侯の茶事を修せし處と。宜なり、雅致よく風流の茶事と相適ふ。室を分ちて三とす。四天王堂は、庵の南に接し、歩して更に東北に及べば地藏堂あり。傍に碑建つ、二色岡の二字を刻す。

○二色岡は、宛然たる一丘陵、楓樹殊に多く、晩秋霜降る候に至れば、樹となく枝となく錦繡を裝はざるはなく、夕陽の

杜牧 唐の詩人、山行の詩に停車坐愛楓林晩、霜葉紅於二月花とのうたはれり。

絶好の處 申し分なきよき地。

眺め更に美しく、石徑に車停めし杜牧の風流も偲ばる。二色の語は、彼の二月の花よりも紅なり、この句に基づくにに非ざる乎。俯すれば、林間に波光の瀲灩たるを見る。磴を下ること數十歩、池畔に達す。池水清徹、水晶の如く、秋ならば二色岡の秋色を倒にひたし、人影明かに其底にあらん。池の濶さ東西五十七間、南北十二間、南端には閘門を設け、水溢る、時は、之を旭川に注ぐべく、其結構の至れる、固より尋常園池の及ぶ所にあらざるなり。

簾池軒は、屋舍の廣さ二十一坪、之を二室に劃し、別に厨を設く。地は園内の勝を攬るに絶好の處、竹林を背にして旭川の碧流に接し、細波穀紋を織る簾池に臨めり。此池よ、周

一道の小流 ひとすぢの細流。

宴を張る 酒宴を催すを云ふ。

燕子花 俗に杜若に作るは非なり。

回五十六間、樋を伏せて水を東より引く。其引口は淀みて潭をなし、更に溢れて一道の小流となり、唯心山の麓に注ぐ。之を二色岡よりすれば、竹林に沿うて東し、右に一門を得、これぞ即ち南門、軒は其東に隣れるなり。凡そ人の客を誘うて此園に遊ぶものは、簾池軒を借りて宴を張るが常とぞ。軒の東に、二ケ所の藤棚あり。東なるは紫にして、西なるは白き花とか。初夏の頃に訪ひもせば、清しき新緑と共に眺めよからん。又北に大蘚鐵數十株あり、觀るに足る。其傍の小池には、燕子花多く栽ゑられ、且つ八個の板橋を架く。こは云ふまでもなく、三河の八ッ橋に擬せるもの。

琴筑云云　琴筑共に樂器の名水聲の清きを喩へて言ひし語。

矼頭　石橋のほとりとさび石の邊

天に　其時候にとの義。

流店は、十二坪餘の樓閣にして、八ッ橋の北にあたる。樓下には左右二條の小棧を架し、其兩側を石にて疊み、中央には水を引く。板にて其流を塞げば、清泉石に激し、淙々として琴筑の音をなし、樓下にほとばしり來る。此時に際して、觴を送りて詩を試みるも宜しく、魚を放つも興ある事なり。其水は東に遶り、矼頭より南注するものと相合し、縈洄して八ッ橋の下に出づ。人巧却て天然を傷ふの嫌ひなきに非ざるも、結構趣味なしとせず。

梅林は是亦一區の勝を成すもの。其樹たる一百の上に出でまじきも、老幹の槎枒たる、地の幽なると相待ちて致をなすの此處、東風料峭の天に珠玉を枝頭に綴り出すや、孤山の勝概宛然として眼前に現ずべし。況や天下の名園にして此一區を得、誰か亦樹の多少を議すべき。花時には、雪の朝や月の夕、疎影横斜の下に步し、暗香浮動の前に立つ、如何に興深く、神清かるべくや。流店より、櫻樹の間を過ぎ、東南に出づれば即ち梅林なり。更に東すれば、門ありて園外に通ず。是ぞ東門にして、門外は所謂櫻馬場なり。

孤山の勝概　孤山と云ふ梅の名所のおもむきで即ち其處の景色。

制や云云　造りかたが質樸にして風雅なること。

利休堂は、分けて三室にせらる。其第一室には、もと利休の像を安置されしも、今は他に移されてなし。其他待合あり厨あり、制や素にして雅、茶博士たる利休の名に恥ぢず、所在地は、櫻馬場より南に折れて達す。舊岡山藩老伊木忠澄、利休の制に倣ひ、別莊として建てしを、此に移せるもの。

▲樓記

猶飛泉なり 矢張り瀧じゃとの義。

彷彿云云 恰も眼の前に見ゆるが如きさまを云ふ。

園中云云 後樂園中にて景色のよきを第一位の義。

○岡山の三公園記

花交の瀧は、小さくとも猶飛泉なり、奇石崖をなす其頂、より落つ。通ずる徑は絲よりも細く、相蔽ふの樹木幽深、人間を距る遠けきを覺ゆ。げにも、此處をば木蘇谷とぞ呼ぶ。曾て信濃路經し吾は、昔の夢をこゝに繰返し、大木曾小木曾の諸景勝、彷彿として眼前に現ず。東の盡頭に泉池あり、花交池と云ふ。東西十二間、南北三十五間餘、飛泉と相對して池中に小島あり、百石島との名を得たり。今し其名の由緒を知るに由なし。此處、流店の南にして、梅林よりすれば西の方に當れり。

唯心山は、園中に於ける勝景の甲たり。此山よ、隆然として起る一丘岡、之を流店よりすれば西北に方り、籠池軒よ

人工云云 人手に成りしものが造化の妙に過ぎんとするを云ふ。

指點 指にてさし示すこと。ゆびさし教ふること。

▲樓記

すれば百歩に過ぎず。全山樹木蓊蔚としき、景致を補ふには奇岩怪石を排す。人工も此に至りて、將に天工を奪はんとするなり。されば、春は幽禽を聞くに宜しく、夏は涼を尋ぬるに宜しく、秋は白雲に伴うて紅葉を觀るに宜しく、冬は雪を犯して句を拾ふも亦惡しからず。小徑開けて三條あり、曲々として人を導き、以て山上に達す。俯すれば、既に探り來し園内の諸勝、一々これを指點して、新來の客に語るを得、眼を北方に放てば、樹梢をかすめて遠く、龍山一帶の青障を望み、白雲以て招くべし。汽車の東西に往來する、農夫の耕地に牛使ふも、また一々之を双眸に收む。側に唯心堂あり、秋の月を賞するに宜し。

○岡山の三公園記

▲樓記　○岡山の三公園記

稚松　わかまつを云ふ年へぬ松樹

青螺　島のことに云ふ語。

是非云云　其然るか然らざるかを知りにくいとの義

島の茶屋は二席に分たれ、園むに稚松を以てし、排するには奇石あり、皆天然の趣を存す。唯心山を下れば、其麓に池あり、園内に於ける最大のものにして、東西五十間、南北三十五間、波上に三個の青螺浮ぶ、其南端の一島に橋を架して通せしめ、客を一小亭に引く。是ぞ即ち島の茶屋なり。側の水中に石標建つ。其表に『上道郡』裏には『境澤』との字を刻む。更に板橋を渡りて隣島に移れば、又しても石標を得たり。表に『御調郡』裏に『みのしま』と刻む。此處、實際に往昔二郡の境域なる乎。後世その石標のみ他より移し來りて風致を添へん爲の業なる乎、今その是非を知りがたし。眺むれば、双鶴松上より舞ひ下り、一は魚を啄み、一は人立

可笑し　興あり。おもしろし。

平野　廣き地面平楚とも云ふ。平蕪とも云ふ。

二王門　二王を置けるする門。

するさま、蓬萊神仙の境かと疑はれ、畫中に落つるの心地するも可笑し。

新亭は、之を園の東北隅に訪ひき。窓ひらけば、十里の平野を望み、其左右を千入の森と云ひ、紅葉の名所たり。若し夫れ、青女のすさび、夜毎の霜に錦たり成す晩秋の頃に來もせば、如何に眺め宜しかるべくや。

千入の森の東に稲荷社、辨天祠あり。其西なる由賀神社は東京なる池田氏藩邸より移せるものにて、拜殿、繪馬殿、神庫等を有す。慈眼堂は、由賀神社の西に隣る。堂前に二王門あり、如意輪二字の額を掲げ、其側には鐘樓あり。佛殿は石を疊みて基礎とし、石階もて賽人の上下に便す。安置する本

尊は觀世音にして、池田侯の持佛なりと云ふ。

芳嵐園小記

園の名、蓋し芳野、嵐山の二勝を兼ねたりとの意に取れるもの乎。地は日笠川の清流に沿ひ、面積一萬五千餘坪、栽うるに數千株の櫻樹を以てす。若し夫れ、梅花鐵笛に散じ、漸く春風駘蕩の候に入れば、萬花一齊に開きて艶麗比するに物なく、遠く望めば白雲の搖曳するが如く、雪の玲瓏たるが如く近く來れば三千の美姫、盛裝して清波に鑑するかと疑はれ、青松の間に點綴するものは、更に一段の風致を添ふ。只その山水花月の勝、芳野と嵐山とを兼ぬるの價値あるや、否やは

拂弗　自身の居室に安置するか、又は身に持ちて信仰する佛體の樣。

艶麗云々　美しさ限りなきを云ふ。

價値　あたひねうち

遲々　春日の暮れんとして暮れおそき形容。

閘門　時々開閉し得るやうに作りし水門。ひのくち。

暫く之を東君に預けん。その花時に際し、遠近の士女來りて宴を張り、遲々たる春日を觴詠して暮し、月を戴きて歸る行樂は、此處も亦相同じ。

縮景園記

園地約四町歩、神田川の碧流を隔て、斜に二葉山、向陽山に對す。岸には閘門を設け、水を泉池にひき、殆ど天然の趣を成す。池をば濯纓と名づけ、小島を築く。其周邊には絶壁あり、平砂あり、瀑布あり、回汀あり、溪谷あり。山水幾多の景、之を咫尺に貯へ、應接に遑あらざらしむ。閣あり、渕風館と云ふ。坐らにして全勝を双眸に收むべし。祺福山とは

其規摸云々　其かまへ又は區域は狹けれども眺めは奇との義。

追懷云々　昔をおもふたねにとゞまるとの義。

星霜　としつきのこと。年數。

相對する小丘にして、白龍泉、楊柳灣、水心島、銀河溪、迎暉峰、曰く何、曰く何、其規摸は小なるも景は甚だ多く、さすがに藩侯の別墅たるに恥ぢず。一に泉邸と呼ぶは則ち此處なり對岸には、桃樹數十株あり。九世淺野重晟の移植の名殘にして當時は數町の長堤に、紅白三百餘株の多きに上り、花候には彩霞棚引き、此園に景色を添へし由なるも、今は春風寂寞として追懷の料に供するに過ぎず。抑も此園たる、元和五年淺野長晟入國の翌年、此地に庭園を卜し、以て四時遊息の所に供せられ爾後世々の國主修補し、今日に至れるにて、星霜を經る二百八十餘現に淺野侯爵の所有に屬す。一たび歩を此に致さば、身の紅塵堆裡にあるを忘れ、晝中に逍遙するの感を爲す。

絶勝の地　景色のすぐれし土地。

經營者　こしらへなす人。

百花園記

阪神電車開通と共に、互に相競うて絶勝の地を擇び、遊園地を開拓するもの多し。中にも公衆の爲に私財を擲ち、天然を利用して人工を盡し、山を築き池を穿ち、嘉木を植ゑて奇石を排し、亭榭樓閣を起し、以て休憩宴飲に便し、他と撰を異にするもの、獨り鳴尾の此園あり。經營者は酒造家の泰斗、辰馬半右衞門氏なり。

此園よ、七千有餘坪、武庫川堤に沿ひ、古松一帶寒翠を滴す下を占め、石を疊みて丘を築き、池を穿ちては水を湛ゑ、到る處に亭あり、榭あり、樓あり、閣あり。曲々として通ず

逍遙云々 ぶらついて日を暮すに宜しと云ふ譬。

傾城云々 牡丹を賞して云ひし語。

る道の左右には、四時の花卉一として栽培せられざるはなく逍遙して日を忘るゝに足る。

四時の叙景、吾が筆の能くすべきに非ざれど、梅老いての後は、櫻花の香雪を釀すあり、散らぬまでに降る雨にも、れぼろ月にも宜しく、執る杯中に落花を浮べんとならば、黄昏の微風に酌むに宜し。晩春の牡丹花、げにや傾城の好顏色、妖艶比するに物もなく、一たび相對すれば神彩人を射るがあり。藤波の寄する、池邊に殊に愛すべく、蝴蝶に似たる花咲く菖蒲すてがたく、水掠めて往來する新燕は、取りわけ雨に景色を添ふ。初秋の萩あはれに、蟲の聲々に歩を停むるは、獨り俳人のみに非ざるべし。楓は賞する足るもの無しとする

名ある物 名稱と云ふこと。

殘雪 春になりて消ぇ殘る雪。

も、移植するにやすき菊は、到る處に幾千株となく、名ある物のみ栽培せられ、凛々しくも霜に傲る。其黄なる白なるも宜しけれど、其芳ばしきことは芝蘭にまさり、操は松柏に過ぐる殊に貴し。月は東に松林は控へ、園には池あれば最も絶妙を極む。冬は雪に宜し、其賞するには時を嫌はざるべきも余は北峰一帶の殘雪を愛す。

四望すれば、攝河泉の峰巒は双眸に落ち、摩耶六甲一帶の山脈は近く頭に迫り、南は大阪灣の蒼波にして、淡路島根の青螺、往來の征帆手に取るべく、百花に富むのみならず、山海の勝を併せ得たるの園、遊者以て平日の勞を慰し、且つ幾年かの命を延すに足らん。若し果して余が斯言の如くならば

倭文（シトリと訓ず。東伯郡舎人村大字宮内に在り。）

隨身門（矢大臣をおきある門を云ふ。）

辰馬氏の經營、德を布く廣しと謂ふべし。

倭文神社

伯耆にて名高き國幣小社、其創建年代を詳かにせざるも、千二三百年以前の古社にして、下照姫命を祀り、相殿に事代主命、健御名方命、少彦名命、天稚彦命、味耜高彦命を配祀せり。いかめしき隨身門を潜れば、本社、幣殿、神輿庫、社務所、籠所等あり。境内は千八百九十餘坪、亭々たる古檜修杉天を蔽ひ、晝も尙小暗し。眼を轉ずれば、東に御冠山を負ひて、西に東郷池を擁し、西南は遠く大山の峻峰を仰ぎ、西より北にかけては、岬角屈曲、久米八橋の濱をなし、岸を隔て、は、征帆の松上に隱見するを見、北海の怒濤は筆を待たざる事にして、北には美德山の奇峰峙つ。凡そ此處、四時の景に富み、人の心を澄すに足るの靈境たり。

征帆云々（走る白帆が松の梢の上に見にかくるを云ふ。）

慶雲（上武天皇の御宇。）

嘉祥（仁明天皇の御宇。）

美德山三佛寺

天台宗の一寺院、之を往古に比すれば、固より觀るに足らざるなり。寺記を按ずるに、當山は慶雲三年、役小角山上の岩壁に就て堂宇を營み、金剛藏王を安置す。のち嘉祥二年、慈覺大師山下に伽藍を建立し、彌陀、釋迦、大日の三像を安置す。現存の本堂は即ち是。

當時は堂舍三十八宇、末寺三千坊、寺域は無慮一萬町歩を

建久 後鳥羽天皇の御宇。

應安 後光明天皇の御宇。

美德山 三德付大字門前に屬せり。

有したり、爾後盛衰一ならず、且つ再四兵燹の厄に遇ひ、法燈の光り頻りにあがらず。建久七年に至りて源頼朝、佐々木盛綱をして殿堂三十八宇を造營せしめ、朱印三千石を寄進せるを最先に、應安二年には足利義滿又四十九院を再興せり斯る名たる佛刹も、磨しゆく年月と共に衰頽し、慶長年中には、僅かに三ケ院となれり。寛永十年領主池田光仲より、寺領として百三十餘石を寄附し、爾後領主代々、堂宇を修補し以て明治に至れるなりき。

所在地の美德山は、一に三德とも書す。東伯郡の東部に位し、其脉を延いて南方なる三國山に連なり、遙かに船上山と相對す。此山よ、甚だ高からずと雖も、全く岩石によりて形成せられ、其勝も亦觀るべく、大山、船上山を併せて、伯耆の三山と稱せられ、三佛寺と相待ちて偉觀を爲す。今禿筆を驅り、其一斑をば示さん。

偉觀 めづらしき壮がめ。すぐれたる景色。

清泉淙々 清き谷川の水がさらさらと

靈境へ逍遙する人となるには、先づ國道の橋津よりすゝし南へ入る四里許、片柴部落を得。此より三朝川に沿うて、浜り、奇岩怪石の間をくゞりぬけ、清泉淙々として苔滑かなる路を過ぐれば、忽ち一橋の横ふに逢ふ、十餘尋の深谷に架せらる、俯し見れば、白雲蓬々として湧き、心魂ために寒けきを覺ふ。ゆきに行き、溪谷殆ど窮りて山門を得。凡そ此に至るまで、山水双ながら勝れ、大に目を娛ましめぬ。

石階を攀づること數十級、坊は其左右に列し、崖に倚り巒

宛然たる　まるで。ちやうど。

凡骨云々　神仙となりし心地すとにて地の靈にして清き草との形容。

錯綜屈曲　入り亂れてまがり〳〵すること。

に門を構ふ。内には櫻樹多く、青苔石を蔽ひ、蔦蘿樹に纏ふたもむき、宛然たる一仙境なり。若し夫れ、彌生の花時ならましかば、千枝萬朶艶雪うづ高く、見るもの皆白からん。尙登ること數十級、方三十四間の平地あり、其中央に堂舍いかめしく聳ゆ。是ぞ一山の總本堂にして、老樹四邊を圍み、蒼〻鬱〻、神氣清爽、頓に凡骨を脱するの想ひせり。

本堂の傍を回りて其後に出で、橋を渡り溪を過ぎ、更に險阪に就けば、土石雨に洗はれて樹根悉く露出し、錯綜屈曲して自ら階段を成す。かゝる趣は、山中に珍しからざる事ながら、今更のやうに思はれて雅なり。阪路一轉、右に折るれば險更に甚しく、文殊堂、地藏堂其側に在り。二堂

臨めり　差しかゝりて居ることなり。

猛雨　大雨に同じおほあめ。

香客　さんけいの人まゐりし人。

共に方三四間、磐石の上に建てられて千尋の谷に臨めり。鐘堂は、更に數十步を攀づべく、奥院へは、牛の背、馬の背の險を踰ゑて觀音堂に入り、而して後に賽するなり。

奥院は、一に投入堂と呼ばれ、方二三間、大巖窟の中に在り。そが上には岩石蔽ひて天井を成し居れば、猛雨至るも柱底數尺の處を洗ふに過ぎず。下方は石滑かに谷深く、路絶ゑたれば、向ひ近づくべくもあらず。凡そ攀ぢて此窟に入る者は、實に百中の二三にして、香客は大抵、仰ぎて之を眺め拜するに過ぎざるなり。此堂は、慶雲三年役行者、匠に命じて作らしめたるもの。其結構最も奇に、先づ堂宇を窟外に於て組み、屋成りて後、これを岩窟に投せしものと推せられぬ

過清云云　其地の清きに過ぎて長く留まりかぬるを云ふ。深山の森々として淋しいと云ふ語

而も基立ち礎定り、千古依然として搖がず。是に於て乎、投入堂との名あるなり。尋ねて此に來れば、水勢既に耳に入らず、鳥語亦響かず、白雲あたりに湧き、幽秀の氣ひし〳〵と人に迫り、過清にして久しく居り難からしむ。此處よ、山水の勝よりするも、寺樓の莊嚴なるよりするも、園內無双の勝境、一遊するの價値、固より余が筆を待たず。只此記、尙其萬一を彷彿せしむるに足らざるを惜む。

送序　人を送るの文體。

小品　短文のことなり。

往々　まゝ。ときに。よると。

雜　並　解

此に雜と云ふは、時序、傳記、紀事、題名、樓記以外のものなるも、中には送序とて、人の遊學、又は歸鄉などを送るの辭あり。議論めきしものも有り、風流なる小品もなきに非ず。友を祭るの文も有り。もと記事文の外に屬するもの多けれど、事の序に文の大體を知らしめんとし、卷末に附したるのみならず、筆執る身には最も切なるべしと思へばなり。又、時序即ち四季に配せざりし、馬關の半日の如き、記事文の性質を有したるものも亦、往々此中に編したれば、隨時に繙讀を要す。

芙蓉峰　富士山の一名なり。

芳山　吉野山のことなり。

異域の人　外國人を云ふ

東洋の公園

玲瓏として萬古、雪を含むは芙蓉峰に非ずや。瀲灩として千頃、碧を湛ふは琵琶湖に非ずや。一目千樹、雪薫じ風白きは芳山の春に非ずや。亂松孤月、金湧き龍躍るは松州の秋に非ずや。天地の美此處に宿り、乾坤の秀亦此處に鍾る。異域の人、我邦に遊ぶ者、山水の景を論じ、花月の勝を評し、世界の樂土とし、或は東洋の公園となす。我れ異域の人を待つに樂土を以てし、或は公園を以てせん。然れども、その山水秀靈の氣、時ありてか仁となり義となり、忠臣となり孝子となり、烈婦俠客となり、或は英氣豪果の氣となる。その花月の

發揮　あらはし示すこと。

國粹保有　時勢如何に變遷するとも、國民固有の長所など決してかわらぬこと

松洲　松島を云ふ。

精や、武威となりて發揮し、文華となりて煥發す。故に我國民が、皇室を尊び國家を愛し、以て義勇公に奉じ、皇祖以來三千餘年、偉大なる國粹を保有する所以のもの、實に此に存し、我邦が世界の表に卓絶せる特質も亦、實に此に存す。嗚呼、山水花月は一の外觀のみ。仁義を之れ緯とし、文武を之れ經とし、以て東方の君子國を形成す。世界の風潮、澎湃たるも、終に我に逼る能はず。時の破壞の至强なるは、芙蓉峰の高きを以て之を防ぎ、文明の東漸するは、琵琶湖の寛きを以て之を容るべく、芳山の花、松州の月、天長地久と共に世界の人と樂まん。記を作り以て、異域の人にして、我邦に遊ぶ者に示す。

故　郷

人の心に忘れんと欲して忘る、能はず、感觸の最も深き處、あはれ故郷に非ずや。古人の詩に『客舍幷州已十霜。歸心日夜憶咸陽。無端更渡桑乾水。却望幷州是故郷』と歌へるも、幷州却て故郷の感ありしと云ふに過ぎず。望郷の念最も深きは、感觸の最も深き處に在り。その感觸の最も深きは、之を出生の地に求むるの外ぞなき。出生の地、必ずしも山水の勝佳なりと云ふに非ず、花月の情、深と云ふに非ず。屋後に聳ゆるは一片の青山のみ。然れども、吾が父祖の骨を埋めたる處と思へば、風に臨みて數行の涙流る、なり。門前

故郷　生れしところ故國ふるさと

のみ　ばかりと云ふ意を示す語。

に通ずるは一掬の野水のみ。然れども、少年の時に同胞と笹舟泛べたる處と思へば、懷舊の念、今日の吾をして斷腸せしむ。花開き花落ち、月盈ち月虧け、別後の春秋二十餘年、懷うて昔日に至れば、我家の境遇、恍然として眼底に映ずるなり、屋後の青山誰が爲にか秀で、門前の野水誰が爲にか清き花の開落を共にせざりしを悲しむは誰ぞ、月の盈虧を同じくせざるを恨みしは何人ぞや。身に三千里外に客となり、雲樹杳として家信絶ね、個中の消息を詳にするを得ず。嗚呼、故郷の戀しさよ。試みに過去の歴史を燈下に回想せば如何、遭遇するところ幾多の快樂ありし乎、幾多の悲痛ありし乎、又幾多の處世的戰爭を經たりしや。吾は之を語ることを欲せ

一掬の野水　小さき川との義。

青山云云　故國の山水の昔にかはらぬを云ふ。

家信絶ね　故郷よりの手紙が來ぬこと

明月云云　心のすみて清く、即ち雑念なきを比して言ひし語。

一唱三歎　極めてよき詩歌をほめて云ふ語。

ず、紅顔の老いしは能く之を説明し得べきなり。人、これ等の時に際するや、心頭一片の雑念なく、明月然り、水晶然り玲瓏透徹、最も霊妙を感ずるものなり。而も胸中の琴線、一たび之に觸るれば、無限の妙音を發す。彼の阿部仲麿、唐より歸らんとして、明州に於て歌ひし『天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』一首三十一字、千秋の下一唱三歎。

艱難辛苦

語に云はずや、艱難は幸福の母なり。又、云はずや、艱難汝を玉にすと。辛苦も亦然り。人の世に處する、希望なきものは非ず、希望大なれば、艱難辛苦愈大にして、將來の快樂亦愈大なり。その辛艱を嘗むると嘗めざるとに、業の成否の岐るゝ處なり。栗園先生、誡を子孫に遺すの一節に『吾れ一種護身の靈符あり。少より老に至るまで、拳々服膺して、未だ嘗て一日も之を放ちしことあらず。今擧げて以て之を汝が曹に傳ふ。汝が曹、宜しく敬みて之を受けて、失墜するなかるべし。但その物たる、彼の神社佛刹より出す所の符とは判然として夐かに別なり。故に目も睹ること能はず、手も取ること能はず、形と影とを併せて亦有ることなし。何をか靈符と云ふ。辛苦艱難、是なり。人備に此四者を嘗めて、而して能く其味を知るときは、則ち以て身を立つべく、以て名を

已が成さんとする所。のぞみ。

靈符　まもりふだ。おまもり。

汝が曹　おまへたちと云ふ義。

▲雜

壽老 いのち長きこと。

少小 年わかきを云ふ。幼少。

農 百姓、卽ち耕夫。

一園 ひとかゝへ。

○才學の應用　千三百四十六

揚ぐべく、以て富貴を致すべく、以て壽老を得べし。然れども、その之を嘗むるは、專ら少小の氣力方に旺んなるの秋にありて、老大の神志、既に衰へたるの日にあらざるなり』と見ゆ。余等も亦護身として、必ず佩ぶべきの靈符にあらずや。

才學の應用

人の才學を應用するは、猶農の米穀を積むがごとし。米穀を豐年に積まば、乃ち凶に飢を救ふべし。平時に多く讀書し、多く才學を養はゞ、有用に際して自ら功を奏せん。百斛の米果して幾旬をか支ふべき。然れども、才學は書を讀むごとに增進し、一園に足らざる胸腹、千萬卷の事を容るゝとも尙餘地あり、容るれば多々益〻辨ず。世の人、美食に飢を訴ふるも、未だ書に飢ゑたるを知らず、美酒に渴を告ぐるも、未だ才に渴するを悟らず。余に一轉語をなさしめよ、人を救ひ世に資するは、啻に米穀のみならざるなりと。

多々益辨ず 多ければ多きほど處分すとの義。

新月 三日月を云ふ

華堂 美しき座敷のこと。

▲雜

花と月（古人の句を集む）

○花　千三百四十七

花を賞するに地あり時あり、其時を得ざれば客に命じて、皆唐突となる。寒花は初雪に宜しく、霽に宜しく、新月に宜しく煖房に宜し。温花は晴日に宜しく、輕寒に宜しく、華堂に宜し。暑花は雨後に宜しく、快風に宜しく、佳木の陰に宜しく水閣に宜し。涼花は爽月に宜しく、夕陽に宜しく、空階に

宜しく、苔蹊に宜しく、枯藤巉石の邊に宜し。若し風日を論せず、佳地を擇ばずば、神氣散緩、了に相屬せず。妓舍酒館中の花に比すると、何ぞ異なうんや。月は寒潭に宜しく、絕壁に宜しく、高閣に宜しく、平臺に宜しく、窓紗に宜しく、簾鈎に宜しく、苔階に宜しく、苔砌に宜しく、小酌に宜しく清談に宜しく、長嘯に宜しく、獨往に宜しく、首を搔くに宜しく、嗽を促むるに宜し。春月は、尊罍に宜し。夏月は、枕簟に宜し。秋月は、砧杵に宜し。冬月は、圖書に宜し。樓月は、簫に宜し。江月は、笛に宜し、寺院の月は、笙に宜し。書齋の月は、琴に宜し。閨闈の月は、紗幮に宜し。勾欄の月は、紘索に宜し。關山の月は、帆檣に宜し。沙場の月は、刀

水閣　水邊に在る高樓。

小酌　小酒宴を云ふこさかもり。

枕簟　夏の昼むしろに臥する義。

斗に宜し。花月は、佳人に宜し。松月は、道者に宜し。蘿月は隱逸に宜し。桂月は、俊英に宜し。山月は、老衲に宜し。湖月は、良朋に宜し。風月は、楊柳に宜し。雪月は、梅影に宜し。片月は花梢に宜しく、樓頭に宜しく、淺水に宜しく、杖藜に宜しく、幽人に宜しく、孤鴻に宜し。滿月は江邊に宜しく、苑內に宜しく、綺筵に宜しく、華燈に宜しく、醉客に宜しく、妙妓に宜し。山水花月の際、美人を見る。更に多韻を覺ふ。美人、韻を山水花月に借るに非ず、山水花月、美人を借りて韻を生ずるのみ。世に花月なくは、美人此世に生るを願はず、盡く是れ、春花秋月の語。

俊英　才士と云ふに同じ。

杖藜　杖と云ふこと

妙妓　年わかき妓のこと。

純白　まつしろなること。

西人　西洋人のこと

口に蜜云云　甘言もて人を惑はし。悪意を含めるを云ふ。

薔薇

薔薇は一花卉なり。その花や、淡紅なるあり。純白なるあり。その態や、露に泣き、風に笑ひ、幽香亦聞くべし。西人多く之を愛す。然れども、一たび之に觸るれば、刺ありて人を毒す。故に我邦の人、之を愛するもの少なし。世の美人に於ても、亦薔薇に類するものあり。而も世人、その口に蜜あり。腹に劍あるを知らざるは何ぞや。噫。

筆

筆の壽や、月を以て計へ、甚しきは日を以てす。而して其

勤怠　つとむるとおこたるど。

營々　いそがはしきさま。

汲々　つとめてやまざること。

性鋭なり。豈に鋭なるを以て、天するに非ざらんや。その勤くこと甚しきを以ての故なり。然れども、人呼ばざれば倒れ、人呼べば則ち直に起つ。筆や口なしと雖も、而も能く人の勤怠を語る。故に其壽の、月なると日なるとは、人の勉不勉をば證す。

足るを知れ

仰げば天の高さ知るべからず、俯すれば地の厚さ知るべからず。人その中間に處し、利に營々とし、名に汲々とし、死に抵るまでも名利に飽くことを知らず。天下誰か名利を好まざるもの有らんや、好まずと云ふものは、常識ある人に非ず。

○足るを知れ

同義 同じ意味と云ふこと。

處に存す 其處に在ると云ふこと。

盈滿 十分なること足ること。

▲雜

○只だ分を知れ

唯分際を超わざらんことを戒しむ。書生は書生、學者は學者商賈は商賈、各其分を守るべし。蓋し、分を守ると滿足とは自ら別なり。同義と誤解すべからず。滿足は自負なり、自負は身を亡すの基、分さへ守らば自ら足ることを知るべし。花の半開に於ける、酒の微醉に於ける、其賞すべく、其喜ぶべきは、常に十分ならざる處に存す。すべて事の七八分なるは十分なるに同じ。已に十分なれば、それ以上を貪るべからず。得んことを貪るものは、身富むも心貧しく、足るを知るものは、身貧しきも心は即ち富む。故に盈滿に居るものと雖も、水の將に溢れんとし、未だ溢れざるが如く、切に再び一點を加ふることを忌む。古人謂はずや、勢は倚り盡すべ

研鑽 研究と云ふに同じ。

能く 其事に堪へ得てと云ふこと

靈活 うまくはたらくこと。

▲雜

からず、言は道ひ盡すべからず、福は享け盡すべからず、凡そ事は不盡の處に、意味偏に長しと。たゞ學は、天の高きが如く、地の厚きが如く、其窮處を知るべからず。死に抵るまで研鑽を要す。人苟も滿足の念生ぜば、明窓淨机、香を焚きて書を讀む可し。

氣を尚ぶ

氣は發達の要素なり、氣なくんば凡百の事みな成らず。困して氣益〻壯んに、窮して氣愈振ふもの、能く大事を成す。才智も氣なくんば伸びず、才智をして靈活ならしむるは、皆氣の致す所なり。文章も氣なくんば光燄なし。如何に其文字

○氣を尚ぶ